大日本蠶絲會報

第七拾參號

明治三十一年七月

目次

●論說
●伊佛兩國に於ける桑樹萎縮病の研究　野村彦太郎
●製絲の話　廣瀨由太郎
●寄書
●蠶の性質變化と蚕種に就て　町田直樹
●蠶絲業家の德義心　伊藤四郎
●桑樹萎縮病に就て　館巳之吉
●蠶業經營革新の機　毛利正雄
●問答
●桑園數藥の利害に就き質問並に答●桑實の發芽力に就き質問並に答●桑樹の害蟲に就き質問並に答●蠶兒に就き質問並に答●濕紙排除法に就き質問並に答●消毒用硫酸瓦斯の件に就き質問並に答●蠶繭の單爲生殖に就き質問並に答●蠶室の件に就き質問並に答●絹絲の化學的性質に就き質問並に答
●統計
●三十一年五月中生絲類及絹物類輸出入調●第二次全國製絲工場調査表
●外報
●奉天省野蠶狀況●伊佛兩國蚕繭狀況●杭州附近新繭及新絲問市狀況
●雜報
●蠶業講習所養蠶狀況●支那生絲に就て●生絲檢査所檢査成績(承前)●蠶業協議會●人工養蠶の成績●臺灣の蠶業事情と養蠶の適否●傳習生募集試驗●蠶業に關する豫算●檢査費と奬勵金●蠶兒生育狀況●蠶種檢査請求切手●岩手縣の蠶業奬勵●山口縣繭共同販入所●桑苗配付●蠶業談話●實習報告式●校長の報告教諭の講話●原種用蠶種の下付●谷子爵夫人の養蠶熱心●製絲場の教誨●同仲會社の組織變更●諏訪の製絲開業●製絲工女の爭奪●高知縣の蠶業●檜原村の蠶況●紙製繭網の廢棄●殺蛹場の建築●峯村喜藏氏●中村正路氏●壁子鄉之助氏●井上邦太郎氏●小四才藏氏●生絲檢査所生絲檢査調●大里忠一郎氏の計音●松津傳次平氏逝く●賽草下賜●叙任及辭令●會員諸件●清國蠶業視察復命書

●大日本蠶絲會第四回品評會開設廣告

本會第四回品評會來る十月中東京市（期日及會場は追て廣告す）に於て開設候に付き會員諸君は可成御出品あらんことを希望す但し本會會員外と雖も篤志者の出品は之を諾し可成多數出陳致し度に付き右出品をも精々御勸誘相成度此段豫告致候也

大日本蠶絲會第四回品評會出品の種類及數量

一出品の種類並に數量を定むること左の如し

蠶種　一種に付（框製五十蛾分以上　普通製一枚以上）

繭　同　一升以上

生絲　同　一捻（十八匁）以上

一蠶種出品者は可成出殼繭數粒を添附して差出さるゝを要す

一出品運送費は出品人の自辨とす

東京市神田區美土代町二丁目一番地

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報第七拾參號　（明治三十一年七月）

●論說

●伊佛兩國に於ける桑樹萎縮病の研究

大日本蠶絲會技藝委員　野村彦太郎

桑樹萎縮病はもと縮葉病と稱するものにして近時愈〻其猖獗を極め處として多少其病を見ざるなきに至れり隨て其病原に就ては從來諸說あり其概要を擧ぐれば左の如し

其病原は桑根の紫斑にありと（練木氏）

紫斑は桑根の固有物にして其最有力なる原因は根の衰亡にして之を起さしむるの主因は枝葉摘採の過度なるにありと又肥料及水分の供給過度なるか若くは不足なるにも原因すと（イ）（白井氏）

其病原は桑根に寄生する壺菌科中の一種の菌類にありと（ロ）（堀、田中兩氏）

其病原は窒素肥料の過多なるにありと（ハ）（白井氏）

前說を取消し堀、田中兩氏の說に同意す（ニ）（白井氏）

其病原は梢條切斷によつて生ずる漏液多きに因ると（ホ）（田中氏）

其病原は桑根等に寄生するバクテリヤ或はマトーダ等に歸するの說あり

其他病原を桑根等に寄生するバクテリヤ或はマトーダ等に歸するの說あり

我邦に於ける萎縮病原說は大抵前條の如し然れども海外殊に伊佛兩國に萎縮病の存否如何に至ては今日尙ほ未決の問題に屬するが故に余は第一手段として此調査に從事せり凡そ一滴の研究をなすに當ては第

一に既知の事實を收集するは正當の手段なり若し此手段を踐むことなしとせば或は其研究の徒勞に屬するの患なしとせず余は是を以て海外殊に伊佛兩國の植物病理學大家及蠶業大家に諮詢し右の調査に從事せり其結果として彼國にも我邦に唱ふる萎縮病あることは余は信じて疑なきに至れり其顚末を揭ぐれば左の如し

一千八百四十四年伊國人(ヽ)チュサチー氏は桑根の皮孔の紫色を呈せる肥大部に壺菌科中の菌類を發見したるにより紫色菌 Protomyces Violaceus と名けたり而して同氏は之を以て伊國にて Falcetto と稱する桑樹根腐病の原因となせり然るに一千八百七十四年に至り(ト)ヂベリー氏(現近伊國トリノ大學植物學教授)は該菌寄生は其結果にして皮孔の肥大病は其原因なることを證し且つ彼 Falcetto とは全く別病なることを證したり踵で(チ)ベルレセー氏(現近伊國バドァ大學植物病理學教授)は(ト)ヂベリー氏の說の正當なることを證明したり余も亦紫根より得たる菌類を純粹培養を試みしに正に壺菌科の Protomyces 屬に近似のものなれども堝、田中兩氏の記載せし所のものに異なれり

次に余は伊國の所謂る根腐病は我邦にて唱ふる萎縮病に關係あるや否やを調査せんが爲に(チ)ベルレセー氏が一千八百八十五年及(リ)一千八百八十七年出版の伊書を見るに及んで根腐病は病菌の寄生に原因する病なることを知るに至れり然るに一千八百九十四年(ヌ)クボニィ氏(現近伊國羅馬府植物病理學實驗場長)は根腐病には原因全く相異なる兩種の病を往々混同せることを證せり之を概言せば一種は桑根に病菌の寄生せるもの他の一種は其根健康なりと

然れども今を距ること百二十餘年前即ち西曆一千七百七十三年伊國人(ル)アルベルチー氏は右の兩種の病の區別あることを證したる後同氏は其實驗說を揭げて曰く桑根の健康にして病に罹るものに在ては其病徵は先づ高枝に發して次第に幹に波及すると同氏又曰く天然種桑は接木桑より能く其病に抵抗することを證せしのみならず其變種の如何に由ても著く其病に抵抗するものと否らざるものとの差異あることも亦夙に同氏の證明する所なり同氏は其一例を擧げて曰く Medoiana と稱する變種は能く其病に抵抗するも其他の變種殊に Limoncina と稱するものは其病に罹り易しと

終にアルベルチー氏は此病を以て摘葉の過度の害に歸したり此の如く摘葉は桑樹を衰弱せしむるのみならず病害に罹り易きが故に其樹の壽命も甚だ短しと是を以て數年間摘葉を廢するときは其樹勢を囘復し根腐病及他病にも能く抵抗し得べしと云へり此根腐病の取扱法に就ても(ル)アルベルチー氏は當時既に其方法を指示せり同氏の說に曰く

其感染したる桑樹は拔取り其腐敗したる殘根は燒却すべし若し氣候乾燥にして好天氣なれば十五日乃至二十日間其跡穴を其儘に開放すべし若し雨天なれば右の日數よりも多きを要すと且つ同氏は其跡穴に生石灰を散布することを奬勵せり此石灰散布法は果樹の腐根の治療法として今日尙ほ傳ふるあるも

(ヌ)クボニィ氏の說に據れば石灰に代ふるに硫酸鐵を施すときは其奏效一層著しと云ふ

此の如く摘葉を以て病原とするの說は現近伊佛兩國の學者の是認する所にして殊に(ヌ)クボニィ氏の如きは大に贊成を表せり而して摘葉に伴隨する直接の害は過剩の水分を生ずるものにして畢竟葉は同化及蒸發作用を主どるものなるに之を摘採するときは根壓力に由て水分を次第に幹に上昇せしむるが爲に其組織に緊張を生ずるも其水分を蒸發せしむるの道なく隨て不化成の水分の材部中に停滯するに至るものなりとは現近學者の是認する所なり

一千八百九十四年出版の(ラ)タマロー氏(現近伊國ベルガモ實用農學校長)の著書を見るに水分の過剩より起る桑病と根腐病とを全く區別せり甲を生理的病(非寄生物病)に編入し乙を寄生物的病に編入せり而して生理的病編の冒頭に揭げて曰く

過水病は或は多血病と稱し或は食傷病と稱して過剩の樹液より起る病なり而して摘葉の間斷なきと其時期を失するとに由て之を發し或は又土壤の極めて肥沃なるか若くは過濕なるに由て之を發すと總て

此病に罹る桑樹は衰弱の狀態を呈し其葉は縮小し且つ黃色に變じて稀少となり早落するに至る而して切口或は瘡口より樹液を漏すこと甚しく隨て樹皮は光澤を帶ぶと云ふ

右は(ヲ)タマロー氏の著書に揭ぐる過水病の徵候にして我邦の萎縮病に符合せり

故に此病の治療法として(チ)同氏は其幹の地に近き處に錐を以て髓心に至るまで下向の一孔を鑿ちて其樹液を漏出せしむべし而して其穴は北向になすべしと或は又鑿を以て半圓形の穴を鑿ち他の障害を防ぐべし而かも尙ほ其漏液十分ならざるとき更に前の一穴に對して橫向に一穴を鑿つべしと

佛國モンペリー蠶業講習所長ランベル氏の通信(リ)により右の病に就て佛國にて左の異名あることを知れり

右の病を稱して佛國にても過水病(イポロピシー)と稱し或は多血病(プレトー)と稱し或は又卒中病(アポプレキシー)と稱すと

此卒中病は佛國のみならず伊國にも此名あると(ヌ)クボニイ氏の說に見えたり其說に據れば其病の急激にして高さ數メートルに達する老樹にして恰も人の卒中病に罹るが如く須臾にして乾枯することありと之を稱して卒中病(カルデアポプレキシー)と云ふと

又佛國人(カ)セレンザ氏が桑樹多血病の題名の下に記して曰く

佛國南部に在ては每年摘葉の後其枝を伐截するが爲めに桑樹に樹液の停滯を來すことは既に伐截編に詳かなり(二百九十七頁ニ見ル)而して每年其枝を伐截するときは過剩の樹液を生ずるが爲に卒は直に發生するに至る勿論其樹液の一部分は之に運用せらるゝも其餘の樹液は一時同化せらるゝことなく材部の組織中に停滯を生じて瘡口より其樹液を漏出するに至る若し其樹液の自然に漏出することなければ其樹皮は膨起し葉は黃色となるなり此際には其樹皮に深き縱傷をなし其停滯を防がざれば其葉は早落するに至ると而かも尙ほ樹は其勢力を回復することなければ其病の根にあるやを實驗せざるべからずと

以上述ぶるが如く過水病は過剩の水分より發生する病症なりとせば桑樹を栽培するに當て如何に排水及肥料の施與に注意すべきか又如何に摘葉及伐枝に注意すべきか又如何に低桑仕立方は過水病を發し易く隨て此の如き方法に由て得たる桑葉は其滋養分に於て缺くることあるやはタマロー氏の(ヲ)桑樹栽培論を通讀するときは其大體を知り得べし余は左に其要領を摘譯すべし

同書第五編土壤の部に同氏曰く粘土に富める土壤に在ては水は浸透し難きが故に常に濕氣に富めり此の如き土壤に植附けたる桑樹は初年に在ては營養を逞ふするも次第に其生長を壓止し且つ材部は水分に富み同化作用は不能となり其葉は縮小するに至ると又耕土の淺深に就て論ぜば總て樹木は其根をして殊に十分生長せしむること必要なり故に下層にして粘土の如き水の浸透し難き所に在ては其根は伸長力を減ずると共に樹は直に衰弱し葉は縮小するに至ると而して濕氣に富める所即ち排水法の設けなき所に在ては隨て其樹の壽命短しと

同編地形の部に同氏又曰く傾斜地は水の流通便なるが故に根は能く延長し其葉は平地に生ずるものに比せば小なりと雖も滋養分に富めりと概して平地に在ては水分を含むこと多量なり隨て霜害に罹り易し然れども其收量多きが故に栽培家は平地を撰ぶと

第四編伐截の部に同氏又曰く摘葉後十日乃至十五日間伐截を見合するものあり是れ甚だ惡し蓋し樹液の循環を止むること久しければ多血病に罹り易し此の如くして葉は稀少となり劣質を呈するに至る而して伐截期は六月中旬を越ゆること勿れと

第六編摘葉の部に同氏又曰く桑病の原因は主として不時の伐截と摘葉の間斷なきとにありと且つ曰く桑樹の嫩幼なるときに每年摘葉するときは其樹をして衰弱せしむるのみならず遂に倒斃するに至ると故に桑樹は其望む所の大さに達せざる年限内は摘葉すること勿れ而して其年限は低桑、高桑の仕立方の異なるに從て植附後三年乃至五年間は摘葉すること勿れ蓋し熟樹の葉は水分に富み蠶兒に給して滋養分少なしと

第五編牧場桑の部に同氏又曰く嫩樹の桑葉を給したる蠶兒は劣等の繭を生ずと云はゞ人恐くは之を信ぜざるべし然れども一年生若くは二年生の桑葉を始終給したる蠶兒より得たる繭は全く反對の結果を證せり此の如き繭より得たる絲は強度と光澤を減ぜり是れ全く嫩樹の葉は蠶兒の滋養分に缺くる所あればなりと

第四編正式伐截法の部に同氏又曰く老枝葉は護謨に富むことなきも能く樹脂分に富めり然るに新枝の葉に在ては粘液及水分に富むも樹脂分は缺乏せり故に老枝の葉を以て蠶兒に給するときは其絲質を強固ならしめ而かも其量重しと

又伊國人(ヨ)バスカリス氏が一千八百九十六年出版書三百九十頁に樹脂分は絲の材質を構成するに必要なることを述べたり

同編同部に同氏は其目的の異なるに從て其伐截を異にすべきことを述べ且つ伐截法に就て五項の注意すべき要點を擧げたり今玆に最も關係ある三項を揭ゞ

其一項に曰く過度に桑樹を生長せしむること勿れ、餘り土を覆ふこと勿れ、過度に摘葉すること勿れ

其二項に曰く伐截を施し易からしめんには桑樹を正形に仕立るを要す、其三項に曰く少々づゝ時々に伐截し多く一時に伐截すること勿れと

第五編低桑植附の部に同氏は低桑を仕立るの利益五項を擧げたり

第一項に曰く春早く收葉し得べく隨て早蠶の食餌に供し得べしと、第二項に曰く樹を早く仕立るを得べしと、第三項に曰く多量の良き收葉ありと、第四項に曰く摘葉は經濟的なりと、第五項に曰く伐截は手早くして容易なりと

而して同氏は其利益に易ふるに大不利の二項を擧げたり

第一項に曰く低桑は其壽命短しと、第二項に曰く其樹をして繁茂せしむるには時々肥培すること必要なり而かも何は毎年伐截するときは終に生長を壓止して其樹は仰倒するの患ありと故に第四編低桑の部に同氏又曰く低桑は通常天然種桑に施せりと蓋し天然種桑は栽培桑(接木等にて得たるもの)より強固なればなり第五編桑の植附支度の部に同氏又曰く予は信ず栽培砧を用ふるよりも天然種砧を用ふるは其利益大なり蓋し天然種の幹は其纖維緻密にして能く又界の激變に堪へ能く永存すと

以上述ぶる所はタマロー氏の所說に係る此等の所說を考ふるときは低桑仕立方は其栽培の便利に易ふるに其樹の萎縮病即ち仰倒病を發し易し隨て其壽命の短きことは自然の勢なり然るを況や我邦に於ては低桑を仕立るに其植附くべき種類と其土塊、排水及摘葉、伐截に注意せざるに於てをや是ゞ以て其低桑の壽命を愈ゞ短縮せしめ隨て萎縮病を來すものにして我邦にて唱ふる萎縮病は泰西の所謂る仰倒病にして過水病の結果なり

余は玆に一言せん萎縮病に罹れる桑樹の枝は叢生して箒狀を呈せしもの甚だ多し換言せば獨逸語の所謂Hexenbesen(ヘクセンベーゼン)狀を呈せるもの少しとせず人或は之を以て萎縮病の徵候に算するものあり一千八百八十五年三月(タ)サヂベツク氏(現今獨國ハムブルヒ植物博物館長)はハムブルヒ植物學會に於て桑樹にもHexenbesen(ヘクセンベーゼン)あれども當時研究不十分にして原因未だ明かならずとす先頃氏に送れる質問に對する返信にも氏は未だ之を十分に研究せずと云へり然れども其原因は蓋し樹液の停滯に由て一時に多數の芽の早生を促かせしにあらんか

以上の事實を總括すれば現近我邦に唱ふる萎縮病は過水病の結果にして摘葉の過度より起るものなり然らば梢條切斷に由て生ずる漏液其者は其病原にあらざること明瞭なり此過水病に就ては伊國に在ては今より百三十年の昔即ち西歷千七百六十七年の當時既にカタヤチ氏の著書(レ)に桑樹過水病の名あるを見れば伊國にて此病を知りしことも亦久しと謂ふべし曩きに理學士白井光太郎氏が氏の初めの說に萎縮病原因を枝葉摘採過度に歸したるも今日より見れば其當を得たるもの、如し

然れども我邦にて唱ふる萎縮病は過水病と根腐病とを混ずるのみならず左に揚ぐる(チ)タマロー氏の所謂る生理的作用に由て發する癌腫病及萎黃病の二種の桑病をも往々混ずるものゝ如し

(一)(ヲ)タマロー氏の所謂る癌腫病(ヨ)バスカリス氏の所謂る腐朽病(ソ)チュボイフ氏の所謂る護謨病は共に同病にして皮部より腐朽して次第に材部の內部に侵入し往々護謨を分泌す是れ全く伐截の不行屆より發するものにして畢竟切口の滑面を呈せざる場合に往々發するものなりと彼の護謨中に發見するバクチリアの如きは其結果なりと云ふ

(二)タマロー氏の所謂る萎黃病は土壤中に鐵分を缺乏するに由て發し或は又其存在するあるも桑樹の之を吸收すること能はざる場合に之を發すと(例へば水分の過度なるが爲めか或は土壤の硬固なるが爲めか或は又燃樹の生長の衰へ或は又春寒の後るゝか或は又光線の透通惡しき爲めに之を發すと)而して此病に罹る桑樹の葉は先づ黃色を呈し後に至て縮小するに至ると然るに過水病に罹るものに在ては葉は次第に縮小し後に至て黃色に變ず

右に述ぶる所は海外殊に伊佛兩國の學者間に唱ふる所說なり然れども右の所說にして果して正當なるや否やに至ては進で精密なる研究によるにあらずんば之を證すること難し

此調査をなすに當て海外殊に伊佛兩國の植物病理學大家及蠶業大家に諮詢せり伊國に在ては羅馬府植物病理學實驗場長クボニイ氏、ペルガモ實用農學校長タマロー氏、トリノ大學植物學教授ヂベリー氏佛國に在ては巴里府植物病理學實驗場長プリリュー氏、同場助手トロツ氏、モンペリー國立農學校植物學實驗場長ボーヤ氏、同校蠶業講習所長ランベル氏にして此等の諸氏は關係の參考書を惠まれ或は秘藏の書冊を一時貸與せられたり又本邦に在ては高等商業學校教師ビンダー氏は伊語の解釋に苦しむ點に訊き英譯の勞を取られたり是等の諸氏に對して余は深く感謝に堪へざる所なり

參考書目

(イ)大日本蠶絲會報告第二回(明治廿五年五月分)(ロ)蠶事報告第九號(明治廿六年三月分)
(ハ)日本蠶業雜誌第五十七號(明治廿六年二月分)(ニ)日本蠶業雜誌第五十九號(明治廿六年四月分)
(ホ)蠶事報告第十號(明治廿七年三月分)
(ト)ヂベリー氏著、一千八百四十四年、譯名、伊國科學者六集會錄事
(チ)ペルレセー氏著、一千八百八十五年、譯名、桑病論
(リ)ペルレセー氏著、一千八百八十七年、譯名、桑樹微生物論
(ヌ)クボニイ氏著、千八百九十四年、譯名伊國產の桑樹の隱花植物的病害論
(ル)アルベルチー氏著、一千七百七十三年、譯名、桑樹の流行病の取扱其栽培法
(ヲ)タマロー氏著、一千八百九十四年、譯名、桑樹栽培論
(ワ)佛國モンペリー蠶業講習所長ランベル氏より余に宛てたる書面
(カ)モレンヂ氏著、一千八百五十五年、譯名、桑樹栽培及伐截論
(ヨ)バスカリス氏著、一千八百九十六年、譯名、養蠶論
(タ)サヂベツク氏著、一千八百八十六年、譯名、植物病害論—獨國刊行植物雜誌二十卷
(レ)カタネヲ氏著、一千七百六十七年、譯名、桑樹過水病論
(ソ)チュボイフ氏著、一千八百九十七年、譯名、植物病害論

●製絲の話

第七回大集會演說

大日本蠶絲會員　廣瀨由太郎

私は島根縣出雲の國の片田舍即ち杵築の生れでございまして是迄斯る大會に出まして演說等を致したことはございませぬ故甚だ下手でございます、且又出雲の國と云ふ所は一層國訛りが多い所でございまして、例へば「ひ」を「ふ」と言ひ「つ」を「ち」と言ふやうに總ての事が間違つて居りますから私の言ふことは甚だ御聞きづらうございましよう、併し出雲の國の古いと云ふことは聞いて居りますが、彼の誰れやらの詠まれた、天の下御稜威仰がぬものはなし神の都は杵築なりけり、と云ふ歌もありますし、又日本養蠶の元祖たる天熊人命は天穗日之命の御子でありまして、矢張り私と同國のやうに思はれます、さうして見

ますと私の方の國訛りが或は本當の國語かも知れませぬ

偖私は豫ねて製絲のことに從事して居りますが、全體製絲の事柄に就ては生絲檢査所技師の高橋先生の教授を受けまして之を實地に應用しつゝありまして、而して此事に就て尙ほ研究したいと思ひまして此程又々上京して目下研究中でございますから、何一つ立派な御話をすることの出來ないと云ふことは御斷り申して置きます、所が此節生絲の事に就きましては色々世間に說がありまして、支那の國の絲に劣つて居るとか、或は伊太利の國の絲に劣つて居るとか、即ち歐米の機織の盛な國では日本の絲を橫絲に使つて縱絲に使はれぬと云ふことを聞いて居る、併し現今に至つては益々其說が盛になつて之が爲に改良と云ふことが大分盛になつて來ました

それで此改良說に就きましては此節に至つて或は完全の機械を据附けて立派にしなければならぬ、或は其原料たる繭を改良して支那繭の縱れの少ないやうにしなければならぬと、如何にも其通りで是迄諸先生の說に從つてやつても見ますし、又私が是迄の經驗に徴して考へて見ますに、全體繭の縱れの深いのは繰絲の際解舒が惡くて節が有り勝ちであると思ひます、それに誠に不完全な機械では立派な絲を取ることの出來ぬと云ふことは分り切つたことである、況や今日は總ての事が機械の世の中でございますから……それで全國の各製絲家が完全な機械を据附けたなら實に幸福のことだと考へます、所が私の考へますのに實はまだ此機械の据附けよりも繭の改良よりもまだ〳〵最も先きに改良しなければならぬことがある、夫れは何かともうすと製絲技術者の養成である、即ち製絲場を監理して工女に立派な生絲を繰らしむるところの人物を作り出すのが今日の急務であります、然らざれば日本の製絲の改良は到底實行することができぬ、私はまだ關東の是迄本場と稱へて居つた所の事は嘱と存じませぬが、何ぜ存じませぬかと云ふと、明治二十七年かの都新聞を見ました所が日本の製絲は惡い癖に長野縣の製絲は外國に評判が惡いから長野縣のは見るに及ばぬと云ふやうなことがあつた、それで私は研究上に却て妨害になる所には行くに及ばぬと云ふ考で、それに現今では私の地方などが却て製絲の技術が進行して居るやうですから〳〵今に及びましても本場には行つて見ないのでございます、それでありますから唯今あなた方に御話をすることは專ら關西の事で、即ち後進國の製絲業の狀態を御話しやうと思ひます、所で此後進國の或は山陽とか、山陰とか、四國、九州等の製絲場を遇つて見ますると、まだ〳〵中には誠に歎はしい所のつまらぬやりかたをして居る製絲場があつて、詰り製絲の事業を逆にやつて居る、即ちしつかりした監督者を置いて工女に生絲を取らすると云ふことはなくつて、專ら工女に賴んで絲を取つて貰ふと云ふ方針を執つて居ります、でありますから出來上つた生絲はお粗末千萬の物が出來て善良なる物が出來ませぬ、近頃本多先生が歐米に於て御調になつた報告に據りますと、日本の絲は繰返しの時に二本上り三本上りの物がある、或は一括の絲の中にデニールの相違があつたり、或は色澤が一定しないものがあると云ふことである、是等の歐米需用先の非難は實に前々から彼の國に駐在する館事の報告、また其他の通信等の書いたものにて承はつて居りましたが、尙今日に及んでも依然として改良の實が見えない、需用先の非難は勿論、おまけに支那絲よりも惡るいと云ふに至ては、不肖ながら苟且にも平素改良に熱心して居る以上は甚だ歎はしく存じます、本多先生の報告は如何にも其通り、私も現に見た所の製絲場にも澤山あります、こゝに一例を擧げますが、併し其例を擧げるに就きまして製絲場の名とか縣郡の名を指すのは差控えて置きます、或る製絲場は餘程古い明治八九年の製絲場でありまして其製絲場は富岡製絲場で使つて居るトモヨリと云ふ機械であります、餘程古いと言つて自慢をして居る、今の社長は七十二三歲で、其工女取締は創設以來使つた女で今年六十三かになるお婆あさんでございます、總ての事が新規の物でなく、工女なども創設以來の工女を使つて居ります、それを自慢にして居ります、是は外面から見ると鐵門を建て鐵柵を設けて立派でありますが中に淚入つて見ると甚だ仕事が惡い、私之を評して錦の囊に馬糞を包んだと同樣だと申しました、そこでどう云ふ風にやつて居るかと云ふと、先

づ繭の殺蛹の點から申します、左程古い製絲場でありますから、殺蛹の事は立派にやつて居るかと思つて見たら、殺蛹するに漸く詰らぬ土藏のやうな所に持つて來て竹の蠶棚と云ふやうなものを拵へて其下に炭火を入れ殺蛹して居ります、其殺蛹するものはどう云ふ人かと云ふと今迄經驗のない日雇やうなものがやつて居ります、それでありますから温度や時間等の加減が分りませぬ故、蛾になつてるのもあり、又度を過ごして絲の取れないやうになつたのや、或は繭の汚でれて固有の色澤を大に損ふたものやなどのものが澤山あります、さう云ふやうな不躾裁をやつて居ります、又繭の撰別などは十分にしない、何ぜ繭の色澤などを撰別しないかと云ふと、さう撰別すると手間も入るし繭の量…生絲の量が少なくなるから撰別が出來ぬと云ふやうなことを言つて居ります、それからして絲を取らせるに別段製絲場に一定の監督者がない社長自ら仕事をして、さうして或る時は銃を携へて獵に出で、或る時は竿を携へて釣りに行くと云ふやうなことで總てのことは工女任せ、到底碌な物は出來ませぬ、且又其生絲場返方でございますが、誠に驚いたやりかたであつて、どうしてやりますかと云ふと、僅かに二十窓の機械で揚返しする工女が十五六人、時によると二十人位も掛つてやつて居ります、而かも其工女は極く素人の下手なものばかりでありますから、中には邪魔になる者があつて、隣りと隣りがくつゝいて袖にひつかゝつて絲を切らしたり、又は絲枠を持ち運ぶときに枠角をあてゝ絲に傷を附けると云ふやうな、或はまた絲緒をつながうとして自分の袖の袂で隣りの小枠の絲を切り、其切れ口が尚ほ袂にくつゝいて居るのを知らずに居るから、夫れが何時のまにか、今つなぎかけて居る絲枠にくつゝいて遂に二本上りとなる等のことを見受けます、是等の譯よりして本多先生の所謂二本上り三本上りができるのです、本來揚返しと云ふものは製絲の仕上げでありまして、此揚返しの仕方が悪いと折角繰製したところの絲が其品位を大に落します、斯るやりかたをして居りまする製絲場は今申上げたところのみならず、隨分外にも澤山ありますやうで…そうして又デニールの事でありますが、承はる所によれば一括の中に七デニールより甚しきは二十デニール以上のものが混はつて居ることがあるとの事、今私の視察したる狀況より考へて見ますと、なる程さう云ふことがあるかも知れませぬ、即ちデニールの檢査と云ふものは本當に度の合つた檢査と云ふものはしませぬ、機械の狂つたものでやりますから本當のことは出來ませぬ、先づさう云ふやうな工合で小枠一枠毎の檢査と云ふこともしない、三日目四日目に一度やるかやらぬでありまして、節の檢査なども立派な檢麁器と云ふやうな器械が揃つてはいるが檢査は出來ない、それでやるから數百人の工女の取つた絲を檢査すると云ふやうなことは言ふべくして行はれませぬ、それに社長とか取締とか云ふものが一週間目に漸く一枠位を檢査して、是は立派と云ふて判斷するのではどうしてもデニールを一定にすることは出來ない、斯る不正の絲を外國に向つてどん〳〵出しますから外國の非難を受けるのは無理もない次第である、私の見た所ではさう云ふ所は一箇所や二箇所ではない、でありますから私は俄に絲の原料の繭の改良とか、或は完全なる機械を据附けると云ふやうなことよりは、先づ〳〵製絲の仕事のやり方の改良をするのが今日最も急務であらうかと考へます、全體此田舍には養蠶はなか〳〵むづかしいと思つて教師を雇つてしますが、製絲は極く容易で誰にも出來ると思つて居るからなか〳〵教師などは雇はぬでありまして、雇はぬで自分勝手にやるからさう云ふ間違が起つて來る、それで私は竊に思ひますのにどうか中央に居て局に當らるゝ御方は勿論、地方の當業家が是非共製絲の技術者を養成して今日の養蠶傳習所の如く各製絲場に此養成されたる所の技術者をして監理者たらしめ、而して全國製絲業の方針を一途に出でしむることに御盡力あり度きものと、折角西ヶ原蠶業講習所に於ては模範製絲場を御建築になつて立派な機械が据附かるやうになると云ふことでありますから、全國の製絲熱心家はどうかせめては一縣に一名づゝ位でも西ヶ原の方に出て來て此製絲の技術を修得し、それが歸つて共に氣脈を通じて製絲改良に從事するやうになつたなら、或は外國の非評も少なくなりて漸次製絲改良の目的を達することが得らるゝであらうと思ひます、實に繭の改良、機械の完全なるものを据附けるのは今

日は急務でございます、けれども是は第二の急務であつて、如何に繭が立派であつても、如何に機械が完全であつても、それを使用する所の人が眠つて居つてはいかぬ、以上述べましたのは唯私が心窮かに思ふて居る所を熱心の餘り慨歎に堪へませぬから今皆さんに申上げるのであります、若し製絲業に從事なされて御居での御方はどうぞ其製絲場に技術者を置いて、そうして、工女任せにすることなく十分工女を監督して、立派な絲を取らせるとこゝがことになされたいと私は切に希望するのでございます、まだ申述べたいことがありますれども、却て貴重の時間を妨げて他の方々に濟みませぬから詰らぬことであります、是れだけで御斷りをする次第でございます（拍手）

●寄書

●蠶の性質變化と製種に就て

新潟縣南魚沼郡中目來田村　大日本蠶絲會員　町田直樹

億兆の人類壽長しと雖も百年を出でずして一新すべく草木禽獸蟲魚各皆一生期の長短はあれど舊を送り新を迎へ循環交代止むことなく實に無盡藏無限界の現象が吾人の眼目に映ずること宛も走馬燈に異ならず而して熟々一事一物の變遷を觀すれは動物にまれ植物にまれ其形狀性質の轉々變化しつゝ來るものあり或は全く純粹不變のものありと雖も概するに一生期の長きものは變化遲く之に反して短きものは變化も亦早きが如し多年植物より一年植物に變化多く高等動物より下等動物に變化多きは是れ即其例證なり蠶の如き短時期の間に三變體をなす昆蟲にありては其性質の變化速かなる豈怪むに足らんや然れども形狀、態度、色別、生活機能、生殖機能等能く其祖先の性質を傳承するは動植二物に於る通則なり此通則に悖りて形狀性質を變ずるもの豈れ原因なくして可ならんや形狀性質の變化を大別すれば左の如し

蠶並に其蛹蛾に在ては

躰軀の大小、肥瘠

斑紋の有無（姫蠶より形蠶を生じ或は形蠶より姫蠶を生じ且つ斑紋に濃淡粗密の別を生ずるの類）

擧性の強弱　擧動の活潑、不活潑等

繭に在ては

形狀　大小、長短、正形、不正形等

色澤　金黃、卵黃、綠黃、雪白、銀白、淡白等

實質　纖維の太細、縮皺の粗密、手觸りの硬軟等

卵に在ては

色澤　青、黃、綠、紫、淡紅、鼠色等

形狀　大小、正圓、楕圓、卵圓、水引の高低等

孵化期　一化、二化、三化、四化等

以上變化の原因を考究せば數多の關係あるべしと雖も要するに人爲的、自然的の二に外ならざるべし

人爲的とは

（一）氣候風土の異なる地へ移すこと

（二）生活機能に必要なる食物の滋養分異なるによること

（三）雌雄の性質異なるものを相合して生殖せしめしによること

（四）飼育の精粗巧拙に因ること

自然的とは

（一）二化蠶となるもの或は一化蠶の二化蠶となるもの

（二）斑紋の有無相通じて變ずるもの

（三）三眠にて上簇するもの

（四）不正形の繭を作るもの或は同功繭を營むもの

以上は天然の變化に歸すべきも二化蠶の一化蠶となり同功繭に多少の差あるが如きは人爲的に左右し得らるゝものならん

方今蠶の名稱幾百を以て算するに至るも此の如き異種類を生ぜし原因は蓋し前數項に過ぎざるべし

蠶絲業の改良に就き喧々として論をなすもの多くは繭質、絲質を一大主眼とし種類の撰擇、製種、護種、飼育法等の攻究をのみ事とし曾て蠶兒の擧性を根本的強健に化育せんと圖るものなきは何ぞや而して此

事たる果して不可能的の事なるか否予は信ず既往の變遷に徴し人爲變化の作用を試みば豈其效果なからんや

蠶種製造業に於て種類の何たるを問はず强健なる性質の系統的遺傳を要望すること是れ予が論點なりとす

今や蠶業教育の道開けてより斯業に熱裏するもの徒に蠶見の衛生を重んじ暗種庫に蠶室に溫度に濕度に給桑に分箔に人工を加へ得らるゝ限りは之を加ふること實に餘蘊なく至れり慈せりの取扱ひをなして多量の良繭を收むるは甚だ嘉すべしと雖も蠶種製造者にして如斯年々歳々蠶見をして愚父の愛子が溺るゝが如く深窓の裡に養はれし昔時諸侯の姫君に於る如く痛はり過きたらんには虚弱の性質をして愈〻虚弱に流れしむるにあらざるかを杞憂するものなり蠶の祖先は野外に在て雨露に侵され蠶蛾の羽翅は往昔は飛翔に耐へしものならんとは考古者の齊く唱ふる所にして今や數千代を經たる家蠶となり美しき繭絲を營むと同時に其性質の甚だ虚弱に陷りしは人工作用累年の餘弊にあらざるなき乎ハーベルランド氏は曰く往昔に於る蠶の黄金時代に於ては聊か注意勤勞すれば夥く繭を得たるの稱贊あり且つ蠶は荒蕪すべからざる健康を具へ凡百の困厄に抗抵したりしが物換り星移り此黄金時代は經過し去りて損害峡亡の世交代し來り凡て蠶を養ふ邦國は新州舊州を論せず最も怖るべきの蠶病流行し其養法の善惡を論ずること なく荒蕪を起すに至れり」と是れ即ち西暦一千七百年代より一千八百年代の中葉に至るの間歐洲に於て微粒子病の猖獗を極め養蠶界の荒蕪時代となりしを云ひ」なり我日本に於ても往昔は蠶病の如きはなかりしものと信ず近年に至り獨り微粒子毒のみならず硬化病、軟化病、膿蠶等の害毒養蠶界に湧出せるもの固より時世變遷の然らしむる所なりと雖も亦蠶見の性質漸次虚弱に流れて害敵に抗抵するの力乏しきに因らずんばあらず思ふて玆に至れば虚弱性質は今や累世の積弊と見做して可なり

現今世間に躰育論の囂々たるは何ぞや他なし少年子弟偏に文弱に流れ敢爲勇奮の氣象に乏しく筋骨萎靡に傾くを以てなり高等動物の精神作用感情等を以て直に之を一昆蟲に擬し難きものありと雖も其軀をし彼の山谷に棲む樵夫は能く憑崖絶壁を攀ぢて意とせず海濱の兒童は能く狂瀾怒濤に投じて怖れず是れ其精神涵養と習慣爲性の如何に躰育に及ぼすかを見るべし又蹠に獅子の子を産むや三日にして之を千仞の

壑中に投じて其力を試むと彼等が猛烈勇壯の性質を養ふ以て知るべし之に反して虎或は羆熊等の幼子を捕へて人工的に飼養せんか生長と共に漸く馴れ柔弱なる處女の如きのみ翻て此理を蠶見に移さんか飼育に熟練なる製種家が數世連綿(蠶見の)鄭重に鄭重を加へて復製したる蠶種に虚弱性の漸く傳らんこと恰も虎子或は羆子を養ふて漸く猛威を失はしむると一轍に歸するにあらざるか予地方の養蠶家を巡視して親しく見聞する所の一例を示さんに熟練なる蠶種家が鄭重の取扱をなして製したるものと不熟練者が放任飼育にて製したるものと同一室に於て同時に飼育せしに好成蹟は甲に在らずして却て乙にありし但し此比較試驗をなしたるものは至て未熟の養蠶家なりし又聞く北海道の如き寒燥の地にて飼育したる蠶種を内地に移して好結果あるに反して温帶地(比較的)の蠶種を我北越地方の如き寒濕の地に移して良成蹟なきは面のあたり見る所なり又聞く清國蠶種は病毒の甚だ多きにも拘らず清國養蠶家が放任飼育にて相應の繭を收むるは蠶兒の裏性强健にして病毒に抗抵力の强き故なるべしと信ず以上の所信を綜合して予は左の如き斷案を下せり

(一)高温育を以て飼育したる蠶種は次年再び高温育と爲さゝるべからず

(二)折衷育を以て飼育したる蠶種は次年再び折衷育若くは高温育に適すと雖も清涼育となすべからず

(三)天然放縱の飼育を以て飼育したる蠶種は次年飼育法の何種たるに關せず失敗少かるべし

如此際に來れば飼育改良に熱衷せる論者或は曰はん飼育に容易なる蠶種を製造せんとして天然放縱の飼育をしたらんには繭質粗惡となり且つ養蠶經濟上容るさゝるべしと予は之に答へて曰はん天然育と雖も繭質の退歩すべきものにあらず飼育上の經濟に至ては日數を要する爲め人夫と桑葉に於て多少の損害あるべく且つ蛆害の歩合等も幾分の影響あるべしと雖も是を以て蠶見の强壯性質を培養するの基本と見做さば利害の比較素より多論を要せざるべく且つ蠶種の代價をして製造費を償ひ尚ほ製造者に幾分の利益を得せしむる迄に騰貴せしめば蠶種家に取りて毫も不都合を見ざるなり勿論這般の事は蠶種家が系統的幾歳月間連綿繼續して始めて蠶見其ものゝ强壯性質を回復するの目的なるを以て一朝一夕の試驗と同一視すべきにあらず又製絲用の養蠶に至ては系統を追ふべきものにあらざるを以て温暖育なり高温育なり巧妙の術を盡して經濟的の養蠶を爲すべきは固より論を俟たざるなり

予は前記の論旨に附帶して更に其希望を述ぶれば蠶種檢査法の施行せられて其蚕紙に種類、名稱、卵量、

製造月日、製造者住所氏名を記載すると同時に原種の育法即ち高温育、折衷育、清凉育の區別を明記せられれんこと是なり蠶業進歩の今日多くは火力を利用して蠶見の發育を促進せしむと雖も寒鄙僻村の小養蠶家に至ては猶古來の法を墨守して改良飼育を講ぜざるもの比々皆然り此の如きものは絲質、繭質の良否經濟の如何等は第二位に措き全然廢棄蠶を出すの不幸を免れんことを勉むるを以て專要とすべし是等のものゝ飼育多くは放任主義なるを以て性質強壯の蠶種を飼養せしめ寒暖の變にも病菌の害にも抵抗せしむるを上策となすべし語を換へて言へば蠶室不完全にして火力を保たず或は火力を保つとするも之が適度を失する如き不熟練者は天然育より產出したる蠶種の如きは斷じて飼育せしめざる爲め蠶種購入の際其何法に據りて飼育したる蠶種なるかを一目瞭然に認めしむるにあり

●蠶絲業家の德義心

在東京大日本蠶絲會員　伊藤四郎

夫れ蠶絲は國家の富源にして何人か其業の隆盛を熱望せざるものあらんや而して我邦蠶絲事業の現況を察するに其外形は頗る發達せるが如しと雖も之を支那の產額多きと伊佛の精良なるとに比すれば後へに瞠若たらざるを得ず今や世界の列强互に勇を競ひ弱肉强食の慾を逞うするの時に方り蠶絲業家を以て自ら任ずるもの一日も偸安徒食すべきにあらず須く奮勵一番公共的精神を以て斯業の振興を企畫し以て國家百年の長計を定めざるべからず然るに滔々たる天下の蠶絲業家を見るに彼等は毫も國家的觀念無きが如し故に彼等の公共的精神に乏しきは勿論にして只一に私利之れ營み私慾之れ貪り其極實に言ふに忍びざるの惡事醜行を爲し爲に斯業の發達を妨害すること最も甚しと蓋し彼等が私利私慾にのみ汲々として公共的精神に乏しき所以のものは職として德義的觀念無きに由らずんばあらず今や人情日に輕薄に赴き道德殆ど地を掃ふに至れるは世間一般の狀況なりと雖も就中蠶絲業家の如きは特に甚しきを見る且つ蠶絲業に關する新聞雜誌の如き德義的文學の記載あるを見ること甚だ稀にして蠶絲業學校若くは傳習所の如き亦倫理教育の殆ど絕無なる以て予が言の敢て誣罔ならざるを知るべし予嘗て某蠶業學校を觀て其寄宿舍の不規律不整頓なるに一驚を喫し敗德的行爲の甚しきものあるを見て坐ろに暗涙に咽びしことあり彼の下駄草履の紛失の如き實に一小些事たるに過ぎずと雖も來客の物品忽ち生徒の爲に使用し去らるるに至ては如何に彼等の亂行甚しきかを證するに足るべく其他劍舞放歌囲碁闘拳等頗る喧騒を極め而して實習に苦情を鳴らし學課を怠り猥褻なる雜談に貴重の光陰を徒費して恬として顧みる所なし嗚呼彼等蠶絲界有爲の青年にして未だ錦衣を着けざるに早已に惰弱的軟化病となり破落漢的敵闘に罹る蠶絲業家の前途推して知るべきなり若し今にして之が一大矯正の策を施すなくんば終に彼の世界の競爭場裡に馳騁することを能はざるに至らん

夫れ蠶絲業の興廢は國力の消長に關すること極めて大なれば之が改進の策を畫し振興の法を講ずるは實に今日の急務なりとす然り而して其策其法一にして足らずと雖も現今の大勢より之を察すれば當業者の德義心を涵養するより急且つ要なるはなしと信ず彼の桑園の改良蠶種の撰擇養蠶飼育の方法及び製絲法の改良等の如き固より一日も忽諸に附すべからざる主要の問題なりと雖も然れども先づ當業者の本心より之を改良するにあらざれば猶水源を修めずして下流の淸きを望むと一般假令如何なる明論卓說ありとも毫も其效を見ること能はざるや必せり然れども當業者或は曰はん蠶絲事業の目的は營利に在り德義心の如き敢て問ふを要せずと是れ謬見の甚しきものなり抑〻人に生て德義心なくんば禽獸と何ぞ擇ばん蠶絲業家にして私利私慾を事とし公益を害するものは之に國賊の名を下すも可なり念ふて此に至れば蠶絲業前途の勁敵は彼の伊、佛、淸にあらずして此最も憎むべき禽獸的蠶絲業家にありと云ふも敢て失當の言にあらざるべし試に看よ世間幾多の德義心なき人を彼等の禽獸的行爲が如何に社會に影響し如何に事業の發達を妨害せしやは之を既往の蠶絲家及生絲商の行爲に徵せば思ひ半ばに過ぐるものあらん彼等が不良の蠶種を輸出し粗製の生絲を以て隣着手段を施し爲に海外華主の信用を失墜せし汚穢なる歷史は實に邦家の爲に痛嘆せずんばあるべからず是に由りて之を觀れば狡計猾策徒らに他を欺罔して以て眼前の奇利を貪らんとするが如きは固より其業に不忠なるのみならず決して人間處世の秘訣にあらざるなり何となれば此等の行爲は一時或は利あるが如きも而かも終には身を亡し國を滅す所の素因となるべければなり

要するに孔孟の仁基督の愛吾人之を知らずして可なりカント、ヘーゲルの倫理道德吾人之を研究するの

必要なしと雖も苟も自身を愛し國家を思ふの徒は豈に人間普通の德義心なくして可らんや既に此德義心あり其業に忠なるや必せり故に世を欺かず人を誣ひず惰惰に流れず逸樂に耽らず一意專心正直を旨として其業を勉めば一門の繁榮之より生じ一國の隆運之より來らん西諺に謂はずや正直は最後の戰勝者なりと記憶せよ蠶絲業家諸氏蠶絲事業は決して個人的事業にあらず國家的事業にして其盛衰消長は當業者の德義心の有無如何に關することを敢て謬劣を顧みず聊か卑見を述べて同感の士に訴ふると云

●桑樹萎縮病に就て

在鹿兒島　大日本蠶絲會員　館　三之吉

近來桑樹萎縮病の原因及豫防法等に就きては各新聞紙を始め苟も農事に關する諸雜誌は隨續として該記事を掲載せざるなし然れども多くは一部の試驗に止まり確乎たる卓說殆ど稱なるは我蠶業界の爲め誠に慨嘆の至りに堪へざるなり元來如斯重要の事項は一日も速に救治法の案出せられんこと吾ゝ同業者の渴望して止まざる所なりと雖も此事たる頗る難題にして決して容易の業にあらざるや亦言を俟ず故に淺學短才子の如き輩の固より探究し得べき業にあらずと雖も聊か實驗せしことあるを以て今其一二を左に摘記して同業者諸氏の參考に供し併せて本會員宇澤豐治君の問に答へんとす

最初該病の自園に發生せし時は其蔓延の狀況も傳染せるものゝ如くなるを以て一種の傳染病なりと誤認せしも爾後各種の試驗と各地巡迴調査の結果とに徵し大に其然らざるものを認めたり即ち其例證を擧ぐれば左の如し

該病は桑樹の種類及土質其他施肥、栽培等の如何に由りて發するものゝ如し然れども此等は病原にあらずして唯だ發病時期の遲速あると被害に輕重あるのみ即ち東海道地方中此病害の最も劇甚なる桑園を見るに種類及土質其他施肥、栽培等の如何に拘はらず到る處該病に罹り實に慘狀を極むるもの尠からず由是觀之は以上の事項は原因にあらずして誘因なることを證するに足る

一種類の關係　予は市平、小牧、柳田、魯桑、高助、金子、九文龍、小幡、山中高助、十文字等の各種を栽培せしに何れも多少該病に罹らざるなし然れども最も發病の早きは小牧、高助の二種にして魯桑、金子、九文龍等之に亞ぎ又發病の晩くして輕少なりしは市平、小幡、山中高助、十文字とす

二土地の關係　土質の如何を問はず概して瘠薄の地は肥沃の地に比し該病に罹ること尠く亦濕地は乾燥の地に比し病害の多きを認む

三肥料の關係　肥料の種類は魚肥及油粕等を施したるものに比すれば堆肥、人糞、牛馬糞等を施したるもの多く殊に施肥の過度なるは一層發病の速なるを認む

四仕立方の關係　該病は根刈桑に最も多くして中刈桑之に亞ぎ大木仕立には殆ど稱なり

五收葉時期の關係　摘葉若くは刈取の時期を失し又は一週年內數回收葉するときは忽ち發病することあり之に反し苗木園にして春期發芽前刈取りたる桑園には該病の發生したるものあるを聞かず

六氣候の關係　該病は寒地の桑園には殆んど稱にして暖地の而も沃土にして繁茂の速なる桑園に最も多きを認む

以上の事實に徵し豫防の方法を探究するに寒地の栽桑者にありては土地の適否及種類の撰擇其他施肥、栽培等に深く注意せば豫防し得べきものと信ず然れども暖地にありては此等姑息の方法にては到底豫防し得べきものにあらざれば識者の教へを待つの外なしと雖も若し強ひて予に豫防の方法を問はるゝあらば予は只仕立方の一法あるのみと答へんとす其方法とは中刈（一名奧羽地方に於て秋田刈と稱する良法）仕立即ち是なり蓋此方法たるや元來暖地の病蟲害多き地方にありては最良の適法にあらざるも萎縮病豫防の一法としては亦相當の價値あると認む希くは同業者諸君速に之を試みられんことを但中刈仕立にせんと欲せば宜しく適當の種類を撰擇するを要す

●蠶業經營革新の機

在滋賀縣　大日本蠶絲會員　毛利正雄

鎖港の迷夢は浦賀灣頭の警砲に攪破せられ、我生絲が一たび、西人の供給をなしてより、需用日に加はり、輸出年に增し、其領稍大を致すや、蠶業奬勵の聲は、喧しく朝野の間に起り、村老閑幼の手業、閑人富者の玩弄物たりし斯業は、一朝忽焉として、國益の首農家副業の魁と稱へられ、偶ゝ數畝の桑葉を以て飼育したる蠶繭が、數十金に値するあるを見るや、甲唱乙和、現はれたる利に奔りて、潛める弊を察せず、只經營の後れざらむをこれ恐る、其勢の疾きこと、箭の走るが如く、河の決するが如く、期年ならずして、北海の邊隅、沖繩の極端、又桑を見ざるなきの隆運を致せり、豈壯且快ならずや然れども、業務に迂遠なるものゝ奬勵、無經驗輩の施設は、失策せざるもの、殆ど稱れに、却て產を傾

け、資を失ふものあるに至る、時に經營施設の謬れるを飛むるものなきにあらずと雖も、勢は對すべからず、經營益〻急にして、得る所益〻悲く、施設愈〻大にして、凶歉に終るもの愈〻加はり、遂に可憐の蠶兒を運の蟲と稱し、安全なる養蠶業をして、世の所謂山師の業と同一見するに至らしむ、慨せざらむと欲するも得ざるなり

醉は醒め夢は破る、盲進の弊に陷りたる我蠶業も、現今諸物價の騰貴即生産費の增加は、其經營に一大頓挫を與へ、本年春蠶の掃立は、各自默契の間に扣減せられたり、而して掃立の扣減は、果して收量を減ずべきや、曰く否、養蠶業の如き、注意の周到、取扱の綿密を要するものにありては、細小の經營施設大多の注意とを為すこと、却て收穫を增加せしむるものあらずんばあらず、曩時施設の謬れるを警めたるは此れがためにして、本年各地蠶繭の生産額は明に其例證を示したるにはあらざるか、噫々これ蠶業經營革新の好機にして、養蠶業は農家の副業として收利最も多く、副業の性質として、計畫施設の過大は得る所少くして失ふ所多きを悟了するの秋なり、國利民福を策するの士、誰か此現象を喜ばざらむ切に望む、斯業の局に當り、若くは先進を以て任ずる諸君は、此の機に乘じ、此の時を利用して、斯業經營の適從する所を示し、盲進の弊を矯められむことを

●問答

●桑園敷藁の利害に就き質問

三重縣岡山郡花之木村　大日本蠶絲會會員　木津悅造

桑園に春期は泥葉を防ぐ爲め發芽前に於て夏期は雜草の生ずるを防ぐ爲に切株後に於て枯草藁の類を敷くは一般の習慣なり是れ全く光線及温熱を妨ぐるを以て桑の發育に害ありと認む如何

答

大日本蠶絲會技藝委員　農學士　針塚長太郎

春季桑園の株際に枯草藁等を敷くは桑葉に土砂の附着するを防ぐの效ありと雖ども多少光線の透過、空氣の流通を妨げ從て根部の健康を害し又は根際に菌類發生の媒介となることあり併し適度に之を行ふには差しなき害なきものとす故に便宜其地方土壤の性質に應じ處置すべきなり特に夏季に於て炎暑甚しき時に於ては地方により敷藁をなすが爲め温度の水分の蒸發を制し乾燥を防ぐの助となるものあり

●桑實の發芽力に就き質問

新潟縣南魚沼郡中目來田村　大日本蠶絲會會員　町田直樹

桑實の發芽力は幾年を經過するも差支なきや

答

大日本蠶絲會技藝委員　野村彦太郎

余は未だ其經驗なきを以て之に確答すること能はず然れども一種の植物に在ても種實の熟否及其貯蓄の方法如何は其發芽力に影響すること大なり故に種實にして十分成熟したるものを精撰し適宜に乾燥し除り温度の變動なき所に貯蓄するときは大に其發芽力をして久しきに耐へしめ得べし若し又播種用に供せんとならば古き種實を避け成るべく前年度に採集したる種實を用ふべし

●桑樹の害蟲に就き質問

靜岡縣濱名郡北庄内村　大日本蠶絲會會員　新村歌三郎

(一)當地方には兩三年間六月下旬より七月中旬に渉り方言ヅンヅン(金龜子ならん)と稱する害蟲黄昏に出でゝ桑葉を害すること甚し之が豫防及驅除の法説明あらんことを請ふ但黄昏に篝火をなすも其效なし

(二)青き小蟲桑樹の先きを食ひ留め其發育を妨ぐ右は如何なる蟲なりや又其豫防及驅除の良法は如何教示を請ふ

答

大日本蠶絲會技藝委員　農學士　石渡繁胤

(一)金龜子を驅除するには朝露の未だ乾かざるに乘じ桑園に出で捕蟲網を以て捕獲すべし又早朝樹枝を搖動し其墜下するを捕り殺すなり

(二)桑の先きを食ひ留むる蟲は青き小蟲とありて何蟲なるや明かならず(標本を桑芽先と共に送附あらば取調ぶべし)但七八月の交桑の梢の芽の間にはスリツプと稱する小蟲を多く見ることありスリツプとは丈凡八厘淡黄色を帶び其幼蟲雄は翅なく雌の成蟲は細長き翅を有し其翅には長毛を存せり此蟲は

蚜蟲と同じく其吻にて桑芽の液汁を吸收するを以て遂に芽を枯らし或は芽に損傷を生ずるものなり此蟲は斯の如く小蟲なるを以て其芽に着きたる初めには氣附かざるものにして芽に害を受けたるを認めたるときは驅除も其效なきなり但此蟲は濕地風除等に多く生ずるを以て桑園は良く耕耘し雜草を除き空氣の流通を善くし土地を乾燥せしむること豫防の一なり

●蠶兒に就き質問　東京府北多摩郡國分寺村　大日本蠶絲會員　市倉良輔

(一)蠶兒就眠の際は全身淡黃色を帶び頭を上げ宛も弓形の如く就眠するを常性なりと愚考す然るに當春蠶兒(白玉)の就眠を檢するに例年に比し淡黃色を帶びず青白色にして且つ頭を擡げず平坦に就眠す(初眠二眠共)右は氣候の如何に因るものなるや將た桑葉に關係あるや斯の如きは蠶兒强弱の點に就ては如何のものなるや

(二)蠶兒初齡中飼育上(溫暖育)乾燥に失したるは大眠後に至て重に軟化病を生ずと說く人あり果して然るや否や

(三)霜害を被りし桑葉を蠶兒に給與せしむるは有害なるや

答

(一)若し其蠶躰軟弱にして或は汚汁を漏すものあるか又は帚糞の附着せるものあらば軟化病に罹れるなり否らざれば氣遣ひなからん

(二)給桑若し不足なればヲキチヤミを出す否らざれば害なし

(三)一時に多食せしむれば害あり溫度を低ふして乾燥を旨とし少量づゝ屢々給與すべし

●濕氣排除法に就き質問　大日本蠶絲會技藝委員　練木喜三

東京府三宅島神着村　大日本蠶絲會員　浸沼半次郎

余が地方は桑葉の發芽早く隨て養蠶期節も早くして四月上旬清明の頃を以て蠶兒を掃下し飼育するを一般の通例とす然るに南風にて微雨朦々たるの時に於ては溫度華氏寒暖計七十八度乃至八十度以上に昇進し尙且濕氣多くして溫度と平均に增進するに至る之を排除するの良法ありや

答

濕氣を排除するには空氣拔窓を開放して室內にて善く乾枯したる燃料を焚きて氣溫を少しく高め以て空氣の流通を計るを便法とす尙ほ此際は桑葉は少量づゝ回數を多く給與し且つ除沙を頻繁に行ひて蠶座の可成乾燥ならんことを努むるを要す

●消毒用亞硫酸瓦斯の件に就き質問　長野縣上高井郡小布施村　大日本蠶絲會員　丸山龍之助

蠶室蠶具を消毒するに際し亞硫酸瓦斯を用ふる事既に大家の明示せらるゝ所にして實驗上亦其效を奏するは生等の確認する所なり然れども亞硫酸瓦斯は動物性のものには有害にして撲滅を期するを得るも植物性微菌即白彊蠶病毒を全滅せしむる效力を有するや否やは未だ疑なき能はず果して效力を有するものとせば幾何量を用ゆべきや又無效なるものとせば他の方法等併て敎示を乞ふ

答

大日本蠶絲會技藝委員　農藝化學士　辻暢太郎

亞硫酸瓦斯は白彊蠶病菌を撲滅するに效あり其分量は蠶室の建坪一坪に付硫黃五十匁を用ゆべし尙ほ委細は本會報第六十七號に記載あり

●蠶蛾の單爲生殖に就き質問　兵庫縣三原郡廣田村　大日本蠶絲會員　不動勝二郎

蠶蛾の單爲生殖は雌蛾の雄蛾に接せずして產みたる卵子の孵化するを云ふものなるが其卵子內には營養卵基を有すれども成形卵基を有せざるもの、如し御實驗あらば御說明を乞ふ

大日本蠶絲會技藝委員　理學博士　佐々木忠二郎

答

蠶蛾の單爲生殖は雌蛾の雄蛾に接せずして產みたる卵子にして其卵子には營養卵基のみありて成形卵基は之を存ぜざることを實驗せられたるもの、如し抑と營養卵基及成形卵基の二者は如何なるものなるか一向相分らず故に右の兩卵基なるものは如何なる性質のものにして卵子中如何なる位置を占むるや其作

用は如何委細報道に接せざれば貴問に答ふること能はず

●蠶室の件に就き質問

新潟縣佐渡郡畑野村　大日本蠶絲會員　岡崎產次郎

我地方の養蠶家は未だ曾て完全なる改良蠶室を構造することを得ず只從來の茅屋なれば如何に修繕を行ひ如何なる飼育法を行はゝ可なるや

答

大日本蠶絲會技藝委員　吉池慶正

余嘗て新潟縣に奉職中官命を帶び親しく佐渡地方を巡廻し養蠶上の實況を視察せり然るに土地の事情斯業に好適なるにも拘らず家屋の構造は概して周圍壁多く養蠶に適良ならざるを知り得たり先づ之を修繕するには左の件に注意すべし

一新鮮なる空氣を誘入せん爲め家屋の南北に面する壁は可成之を切り拔き障子に改むること

二陳腐なる空氣を排出せん爲め天井板に大なる氣孔を設くるか或は之を木羽返となすか或は簀天井となし更に屋上に排氣管を設くるか或は破風に排氣窓を設くべし蓋し其方法は何にても宜しければ可成行ひ易きを選むべし

三屋内の欄間等壁なるときは之を障子に改むるを要す

飼育法の事は之を詳說すれば甚だ繁雜に渉るの恐あれば之を言ふを得ず雖も要するに佐渡地方は濕氣多きは地理上の然らしむる所なれば出來得る丈け蠶室内の乾燥するやう給桑、除沙等總てに向ひて注意を加ふべきなり

●絹絲の化學的性質に就き質問

山形縣西置賜郡十王村　大日本蠶絲會員　佐藤慶藏

吐絲口より絹絲の出づるに先ち其外圍は膠腺より分泌する所の膠質に被包せらるゝものゝ如し而して既に空氣に觸るゝや自已固有の水分と空氣の酸素と化合してセリシンに變ずるものなれば濕氣の如何に由りて其膠質及膠質も亦フヒブロインと同樣に酸素と化合してセリシンに變ずるものなるや

答

大日本蠶絲會技藝委員　農藝化學士　辻暢太郎

膠質は空氣及水分に觸れて變化するものにあらず膠質とは絹絲腺の皮膜なるか若し皮膜なれば護謨質即ちセリシンに變ずるものにあらず

●統計

●三十一年五月中生絲類及絹物類輸出入調

（大日本外國貿易月表に據る）

種目	數量	元價	收稅
輸出			
生絲	三二三、八五四斤	二、六二六、五三五・八三〇円	七六、五一〇・六八六円
煮絲	六七、一三八斤	四七、八六六・二五〇	一、五八六・一五三
屑絲	七三、五一九斤	四六、三五七・五九〇	五二一・〇七五
眞綿	六斤	一八・五〇〇	三九四
屑眞綿	二一、二一七斤	二、五四六・〇二〇	一二七・三〇一
縮緬	五五段	八一四・七五〇	
羽二重	五〇、〇七六段	七三二、九五一・九四〇	
甲斐絹	七九五段	一〇、〇七五・五六〇	
他の諸絹布	二、七九九段	一三、三九二・一一〇	
綿布	二一四段	三七四・九五〇	
絹製手巾	一二六、八五四打	三四二、三一五・二七〇	
他の諸絹製品		三五、五七二・九一〇	
計		三、八五八、八二一・六八〇	七八、七四五・六〇九

種目	數量	元價
輸入 繭	三六、四八五斤	一四、九一一・四四〇
輸入 野蠶絲	一、九五三斤	四、八〇七・〇六〇
輸入 絹織	一〇、五五七斤	三四、八三五・五二〇
輸入 縮緬絹紬	一、七〇二碼	一、二二〇・六六〇
輸入 縮緬	一四六、四九〇碼	三〇、二〇六・五六〇
輸入 他の諸絹布	一七、〇三〇碼	二一、四六四・二〇〇
輸入 縮緬子	二、九五八段	二〇、〇〇四五・八二〇
輸入 絹綿縮子	六、一〇九碼	三、〇七二・四二〇
輸入 絹綿天鵝絨	六〇、三八三碼	五四、五三四・九二〇
輸入 他の諸絹綿布	四段	一、七六〇
輸入 其他諸絹製品		四五・〇〇〇
輸入 計		一八五、六五五・三六〇
生糸	一、二八三、六七〇斤	一一、〇九一、三七〇・一一〇
屑糸	六三六、一三二斤	五〇三、〇七八・七五〇
屑繭	九五〇、三二〇斤	五八一、六三三・四七〇
空繭	一三、〇三五斤	九、三〇〇・〇〇〇
屑繭	二一、六四五斤	六、四九四・〇〇〇

（備考）三十一年五月中の外國貿易通計は輸出千二百六十四萬七千三百〇一圓二十一錢、輸入三千〇二十五萬九千六百十五圓六十九錢にして輸入超過は千七百六十一萬二千三百十四圓四十八錢なり

〔參照〕三十一年自一月至五月生絲類及絹物類輸出累計

輸出	繭	七四五・五七二
	野蠶絲	二四〇・三五三
	絹織	一、七四一・七七六
	縮緬絹紬	六一・〇三三
	縮緬	一、五一〇・三二八
	他の諸絹布	一、〇七三・二一〇
	縮緬子	一、〇〇二・二九一
	絹綿縮子	一七八・六二一
	絹綿天鵝絨	二、七二六・七四六
	他の諸絹綿布	五八八
	其他諸絹製品	二・二五〇
輸出 計		九、二八二・七六八

●第二次全國製絲工場調査表（其一）

農商務省にては曩に明治二十六年に於る全國製絲業の實況を調査して世に示されたりしが今又明治二十九年の實況を調査して世に公にせられたり是れ全國製絲業に關する最近の調査なり但し其調査は十人繰以上の製絲業に限り其以下に及ばずと雖も亦以て全國製絲業の近況を知るに足るべきなり

緒言　今回調査の成績を以て之を明治二十六年の調査に比するに一製絲工場の數に就きては三百〇三箇所の減少を見る然ども是れ五十人繰以下工場の減少にして五十人繰以上の工場は却て其數を增加せるものゝ如し而して五十人繰以下の工場に尙ほ頗る多きを占むるの現況なりとす即ち左表の如し

| | | |

百人繰以上	器械	二七三	三六〇	一二二	一三八	一五二	二二二	五十人繰以上	器械	五〇九	五五〇	三四九	三八八
	坐繰	八七		一七		七〇			坐繰	四一		三九	二
十人繰以上	器械	一、四八〇	一、九五四	二、一二九	二、六七一	△六四九	△七一七	合計	器械	二、二八三	二、九〇〇	二、六〇二	三、二〇三
	坐繰	四七四		五四二		△六八			坐繰	六二七		六〇一	
合計	器械	二、二八三	二、九〇〇	二、六〇二	三、二〇三	△三一九	△三〇三						
	坐繰	六二七		六〇一		一六							

二製絲器械運轉の別に就きては人力水力に依りて運轉せる工場の減じて汽力に依るものゝ増加せるを見る即ち左表の如し

運轉の別		廿九年	廿六年	廿六年に對し廿九年の増減
汽力		八二九	五一三	△印は減
水力		一、〇七七	一、一五一	三一六
人力		九九四	一、五三九	△七四
合計		二、九〇〇	三、二〇三	△五四五
				△三〇三

三繰湯の別に就きては火力（炭火薪火等）を使用せるの工場を減じて蒸汽を使用せるものゝ増加せるとと左表の如し

繰湯の別		廿九年	廿六年	廿六年に對し廿九年の増減
蒸汽力		一、五三三	一、一七四	△印は減
火力		一、三六七	二、〇二九	三五九
合計		二、九〇〇	三、二〇三	△六六二
				△三〇三

四繰籠の別に就きては再繰直繰共に減少を示せるも其の割合再繰は六分直繰は八割二分の減少にして後者減少の割合遙に大なるを見る而して全國製絲工場中其大部は再繰法を採れるの現況なりとす

繰籠の別		廿九年	廿六年	廿六年に對し廿九年の増減
再繰		二、八七二	三、〇五二	△印は減
直繰		二八	一五一	△一八〇
合計		二、九〇〇	三、二〇三	△一二三
				△三〇三

五釜數に就きては器械製絲に於て五割二分坐繰製絲に於て七割四分の増加を示せり即ち左表の如し

		廿九年	廿六年	廿六年に對し廿九年の増加
釜數	器械	一三〇、七五三	八五、九八八	四四、七六五
	坐繰	四七、五一四	一九、一六九	二八、三四五
合計		一七八、二六七	一〇五、一五七	七八、一一〇

六生絲製造高に就きては器械製絲に於て五割二分坐繰製絲に於て十一割一分全體に於て五割九分の増加

を示せり而して廿六年に於ては器械製絲全製造高に對し八割九分坐繰製絲は一割一分の比なりしもの廿九年に於ては器械八割五分坐繰一割五分の比を示せり左表を參照すべし

	廿九年	廿六年	廿六年に對し廿九年の增加
生絲製造高 器械	五、一四〇、六二七斤	三、三八一、〇〇八斤	一、七五九、六一九斤
生絲製造高 坐繰	八九一、一一一	四二三、四一三	四六七、九六八
合計	六、〇三一、七三八	三、八四〇、四二一	二、一九七、三一七

七一釜に對する生絲製造高に就きては器械製絲に於ては增減なきも坐繰製絲に於ては三斤の減少を示せり左表の如し

	廿九年	廿六年	廿六年に對し廿九年の增減
一釜に對する生絲製造高 器械製絲	三九斤	三九斤	
一釜に對する生絲製造高 坐繰製絲	一九	二二	△三

△印は減

八生絲百斤に對する製造費に就きては器械製絲に於て一割五分坐繰製絲に於て三割二分全體に於て二割二分の增加を示せり左表の如し

	廿九年	廿六年	廿六年に對する廿九年の增加
百斤に對する製造費 器械製絲	一二六円	一一〇円	一六円
百斤に對する製造費 坐繰製絲	一〇八	八二	二六
平均	一一七	九六	二一

以上の成績に依れば工場の數に五十人繰以上を增加して五十人繰以下を減じ運轉の別に於て人力、水力を減じて汽力運轉を增し又繰湯の別に於ては蒸汽使用を增加して火氣使用を減じ其他釜數、生絲製造高の著しき增加を示せるが如き蓋し是れ斯業發達の兆證にあらずとせんや然りと雖も熟〻其實相に就て之を觀察するに今尙小規模の工場其多きを占め器械の完全ならざる原料撰別の疎雜なる組織の堅固ならざる管理の適當を得ざるが如き宜しく改むべくして未だ改めざるもの多く爲めに此等工場より製出する生絲に幾多の缺點を存し延て本邦斯業の進路を阻碍せること尠しとせず本邦當業者宜しく字内の形勢に鑑み奮勵以て之が改良發達に勗めずんばあるべからず

今回の調査に於ては繭使用高屑物產出高及工女の數の三項を增加せり左に繭使用高と生絲製造高との比較及工女の數を揭げて參照に資す

	繭使用高	生絲製造高	繭使用高一石に對し生絲製造高	屑物產出高	繭使用高一石に對し屑物產出高	女工の數
器械製絲	八八七、〇九八石	五、一四〇、六二七斤	五斤、七九	一、三〇二、九二三斤	一斤、四八	一三四、四四四人
坐繰製絲	一四九、七五一	八九一、一一一	五、九五	二九、四七一	一、四七	四八、四六〇
計	一〇、三六、八四九	六、〇三一、七三八	五、八二	一、五三二、三八三	一、四七	一七二、九〇一

本局は此調査を爲すに方り凡例を擧げ以て廳府縣に照會し之が材料を採收したり固より地方の狀況に從ひ自ら其調査に疎密の憾なき能はずと雖も一朝之が完全を期するは得て望むべからざる事實の存するあるを以て漸次之が完成を期せんと欲す當事者此篇に由りて考案稽査以て斯業の發達を資くるあらば固に國家の幸慶にして亦以て地方當局者調査の勞を慰するを得ん

明治三十一年四月　　農商務省農務局

●奉天省野蠶狀況

牛莊駐在帝國二等領事田邊熊三郎氏の報告に曰く野蠶絲は滿州殊に當奉天省の產物中重要品にして當港年々の輸出原價に於ても頗る多し其蠶種は即ち野蠶にして山に放ち土俗不落樹（薄羅樹とも書す）と稱する柞樹の葉を食するものなり夫の遼當の家蠶に至りては遼河の西義州府附近に於て飼養するものある由なれども產額極て少く殆ど言ふに足らずと云ふ近來本邦に於ける當港と商業上の關係漸次密接し來りたれば本省養蠶の景況も亦我當業者の參考に多少裨益する所あるべし

▲養蠶地域　當奉天省內野蠶を飼養する地方は遼河以東、北は遼陽奉天に及び東は寬甸、安東等の韓國境に達する所謂遼東半島一帶の地にして就中蓋平、岫巖及寬甸等を以て最も盛なりと聞く所に據れば十年以前までは養蠶地域は此の如く廣からずして重に當半島の南方地方に限られたりしが近年絲價の漸次好況なるに從ひ北部地方にも及ぶに至れり而して一旦北部に飼養せし蠶種を南方溫暖の地に移し養ふときは絲を得ること割合に多しと云ふ

▲養蠶法概略　養蠶は春秋兩季にして春蠶は前年の秋蠶より取り秋蠶は其年の春繭より得るなり春季に在りては穀雨に蛾出でゝ卵を放ち立夏に至り全く孵化して蠶兒と爲り四眠を經て夏至より小暑に掛け繭を作る又秋蠶は大暑に蛾出でゝ立秋に孵化し畢り五眠を經て秋分より寒露に掛け成繭す故に秋蠶の飼養季は春蠶に比し通例凡そ一節氣間即ち十五日許長しとす今秋蠶に就き飼養法の概略を述べんに初伏前數日春繭を山より取り來り細き麻絲を貫ける針を用ひて繭の小端なる浮皮（即ち屑絲と爲るもの）に經ひ串き累々數十顆を連ねて靜なる室內に掛け置くこと凡そ六七日にして繭中の蛹は化して蛾と爲り一種の酸液を吐き繭の大なる端を濕して膠質を溶解し絲を害することなくして穴を穿ちて出づ蛾の出づるは概ね日沒頃に在るが故に二更頃に及び雄蛾を除き雌蛾のみ二匹づゝ取り其翅の根を細き麻絲の兩端に綁し二蛾の相離るゝ凡そ七八寸許と爲し之を豫て室內に折取り置きたる柞栃の枝上に掛け以て一宿を經れば盡く蠶卵を樹葉上に放下し了り其より七日許を經て孵化す是れ即ち秋蠶なり孵化後數日間は尙ほ室內に於て嫩葉を以て飼養し然る後之を山に放つ其より一眠を經る每に漸次長大と爲り五眠を經たる後は長さ我三寸五六分に達し第五眠後數日に至り樹葉を捲きて其中に屆く以て繭を作り始め二三日にして全く作り畢る蠶の樹に在る間は山鳥等のため害せらるゝの恐あるを以て常に捕入を置き晝夜怠らず時々空銃を放ち以て之を防ぐと云ふ

▲養蠶樹種類　野蠶を飼養する樹は總て之を柞樹と謂ひ土俗之を不落樹又は薄羅樹と稱すれども之を區別すれば大葉柞、小葉柞、尖葉柞及胡桃樹等の名稱あり又土俗大葉柞、小葉柞を總稱して青槓子とも謂ふ凡て柞樹を植うるは山地にして土質は黑土黃土沙石有する土にても不可なるなし唯南方の地方を選み五尺許づゝ相隔てゝ植附くるを好しとす柞樹の種子を樣子と稱し之を時きてより最初五六年間は少量の蠶を養ふべく其十分繁茂して多量の蠶を養ふに至るには凡そ十五年を要す大抵三年每に伐採し常に高さ五六尺以上を超ゆるなからしむ是れ蠶兒取扱上の便利と枝葉の繁茂とを得んがためなり

▲收繭額　當省一箇年間收繭額の幾何なるやは固より統計の據るべきなきを以て其確數を知る能はざれども當業者の推計する所に據れば豐收の年には一箇年千四五百萬「千」（但し生繭の賣買は顆數に依り千顆を以て單位とす）を得べく而して其中大約二三百萬「千」は莊河、大孤山及安東等南方の沿海諸港より年々山東省へ輸出し其餘は概ね絲に製し蠶絲の中央市場たる蓋平、海城の兩地方へ輸送販賣すと云ふ

▲春繭秋繭比較　飼養季間に於て秋蠶は春蠶に比し凡そ十五日間永きことは前述の如し其結果成繭に至りても秋繭の形大にして絲量多きに反し春繭は形小にして絲量少し故に春蠶は蠶種として生繭の儲販賣するにあらざれば收支相償はざるを以て秋蠶に比し飼養高遙に少く其割合三と七との如く春蠶は殆ど秋蠶のため蠶種を得るを目的として飼養すと云へり今生繭及空繭各〻每千顆の重量及絲量に就き春秋兩繭を比較するに略〻左の如し

	春繭	秋繭
生繭千顆の重量	六斤乃至七斤	七斤乃至八斤
空繭千顆の重量	一斤內外	二斤內外

繭千顆より得る絲量　五兩乃至六兩　八兩乃至十二兩

又製絲後の優劣を見るに春絲は概ね春季の空繭より製するものなるが彈力の弱く節多き點に於ては秋絲に及ばざれども色較〻白く纖維較〻細く且つ柔軟なるは春絲の秋絲に優る所なり

▲製絲法一斑　製絲所は之を框絲房と稱し重なる養蠶地方に於ては何も多少の製絲所あらざるはなく就中蓋平を以て最も多しとす茲に當業者に就き聞取りたる製絲法の概略を述べんに先づ麵蘇（即ち土產の曹達なり）を水に溶解し之を大鍋の內に入れ火を焚き之を熱し然る後繭數千顆を其中に投じて善く攪き交ぜ以て殺蛹を行ひ次に其繭を蒸籠の中に移し鍋上に置き麵蘇水を離る〻二寸許ならしめ鍋の下には尙ほ火を焚き日沒頃より夜半に至るまで絕えず之を蒸すなり但し始には小火を用ひ中頃に至り火力を大

にし鍋中の蠶蛾水をして漸次沸騰して蒸籠中に上り繭を一面に濕さしめ後又小火に復す而して鍋中の水は漸次減じて鍋底に至るも決して之を乾かしむべからず蓋し水少くして竟に乾燥せしむると又多きに失するとは何も製絲に害あり即ち水の適度を量るは大に巧拙の存する所なりと云ふ此の如くして繭已に蒸し了れば取出して外皮の屑絲を剝去る之を大挽手と稱す次に絲頭を搜出して之を卓上に置き絲の細粗良否を區分し以て框に掛く框は通例大小二種あり大なるものは直徑二尺四寸、小なるものは一尺六寸あり繭より絲を繰り了りたる後殘の屑絲は之を二挽手と稱し又其の蛹に密著せし部分を別に蛹青と名け最劣等の絲なりとす職工の賃銀は仕上げたる繭の多少に依り最高を千顆に附き一吊二百文目下の相場銅錢六吊六百文を以て銀一弗に換ふと定め其以下技の巧拙に依りて差あり而して巧者は一日に千二百顆を仕上げ得るも拙工は僅に五百顆を仕上げ得るに過ぎず但し食事は雇主持とす

▲輸出額　當省蠶繭の年々二三百萬〆千〆ゝ山東省に輸出せらるゝことは既に前述の如し是れ同省特殊の產物なる夫の山東繭紬を織るがためなり又蠶絲は重に上海に需要ありて通例該地の客商等蓋平及海城に來り買入れの上當牛莊港より汽船に頼りて輸出す今一昨二十九年間蠶絲、蠶繭等の當港輸出額を示せば左の如し

野蠶絲	六三四、三〇〇	八〇五、六三六
屑絲	二二七、一〇〇	六六、七三八
蠶繭	二、七〇〇	九一七

即ち一年の輸出原價總計八十七萬餘海關兩に上り輸出原價の最多額なるものとす其他冬季當港の封河中上海の絲況頗好なるときは陸路旅順口に輸送し同地より支那政府の運送船に便載し若くは支那形船に搭載して芝罘へ輸出することあり其額は明治二十五六年頃迄は凡千五百俵內外なりしが右旅順口、芝罘間には海上保險を附する能はざるを以て力て之を避くるの傾ありて近年は平均八百俵內外なるべしと云ふ

●伊佛兩國收繭狀況

伊太利に於ける本年の繭收獲は其優等なるべきこと今日に於て殆ど疑ひなし但し佛國に於ては孵化前に蠶卵を減少せしを以て今日まで確めたる所には發育上常例の經過なるに拘らず其收獲は前年に劣るべし（六月十三日發里昂駐在帝國二等領事山田忠澄氏電報）伊國に於て本年孵化に供したる蠶卵は昨年に比し少額なるに拘らず繭の收獲は同年に優るの見込あり其相場は昨年の同時季よりも凡そ一割方高し（六月二十四日發伊國駐劄牧野特命全權公使電報）佛蘭西繭の收獲は好良ならず繭の價格は登る上向にて或る地方には三法二十五參を唱へ伊國繭も亦昨年よりは高價なり

（六月二十五日發　里昂駐在帝國二等領事山田忠澄氏電報）

●杭州附近新繭及新絲開市景況

在杭州帝國領事館事務代理速水一孔氏より六月六日附を以て外務省へ左の如く報告あり

其後天氣順當にして各蠶は漸次適度に成長し晩蠶も數日前に何も成繭を了れり五月中旬餘杭の通信に據るに該地方の蠶況は上景氣に上作なりと云ふ又寧波、紹興府下の繭況も何も上作にして生繭上市の價格は每斤四十三四仙乃至四十七八仙なりと云ふ當杭州西湖湖畔に開設せる養蠶學堂に於ける各蠶種の結果を聞くに當地方に於ける蠶種の製出を以て有名なる餘杭地方の蠶は病毒頗る多く隨て試育の結果未だ以て十分なる爲すに足らず成繭の上却て或る地方のものより劣るの觀あり而して紹興府下新昌縣の蠶種は病毒少きのみならず生育殊に善良にして頗る好結果を得たり而して成繭は甚だ美にして遠く餘杭產に勝ると云ふ頃日新昌地方の人當地に來り該學堂の新昌繭を見て新昌地方に於て其上出來なるものは學堂產出の繭に比し尚は一層勝ると云へり其言の眞僞は之を確むる能はずと雖も新昌地方の產繭は之を輕々に看過すべからざるものあり

本年の新絲は六月二日始て取引を開けり其同業議定の買入價格は細絲（經絲）每百兩に附き洋銀二十八弗、太絲（緯絲）每一兩銅錢二百六十五文（本日相場銅錢千十文を以て洋銀一弗とす）なり今當業者の語る所を聞くに本年各所の出來何も宜く當杭州長山門外一帶の地は先づ八分出來なるべく而して仁和縣下塘棲鎭地方及湖州府、嘉興府、海寧州の各產地は何も十分の作なり之が爲開市以來當地に運入する新絲は殊に多額にして大に上景氣を呈せり但し本年の新絲は例年に比すれば當の割合に目方輕しと云ふ昨年新絲開市も六月二日にして其當時の相場は細絲百兩に附き杭州二十六弗五十仙、海寧二十八弗、太絲每一兩銅錢二百五十文なれども作柄十分ならざるため三日を經ざるに細絲は三十弗を超え漸次上騰し運入數量も至て少かりしが本年は上作にして且つ運入數量許多なるため從來の不景氣漸く回復の見込あるものゝ如し現に當地絲問屋の最も大なるは戴隆昌及沈同豐の二家のみにして六月二、三兩日間に買入れたる價格は合計七萬兩ありと云ふ以て其景況の一般を想像するに足るべし

茲に見聞せる所に據り新絲取引の景況を陳ぶべし從來當杭州城內には絲問屋凡そ二十家あり問屋は新絲上市の前に於て豫め其年產額の工合及從來絲價の關係を研究し同業議定の上買收價格を一定し而して開市の時日をも定む此問市以前には單に見本を集むるに止め新絲の取引を行はず

當地方の養蠶者は戶々少數を養ひ成繭の後は自ら絲を繰り之を問屋に賣渡すものにして解遠の地には別に仲買商等なきものゝ如し故に當地方の問屋は開市の後曾其賣手を俟ちて買入を爲すものなり開市當日即ち本年の如き六月二日に至れば早朝より各賣主負擔して初賣を爲す而して二日目には問屋に於て酒宴を張り賣客を饗應するの例なり各地の賣客は各〻白布を以て製したる細長き袋に自家賣出の生絲を容れ曾之を背負ふて少きは五六人、多きは五六十人隊を成して各〻得意の問屋に入る問屋は第一に其絲を改め重量の立合計算を了り價格を定めて番號を記したる竹簽を之に挿み他室に運ばしめ而して客を宴席に招す故に宴席は別に酒肴の備なきも來去縱横織るが如く應接に遑あらざるの觀あり其三日目よりは全く專門の取引を爲すなり毎年賣出を爲す者は多く三日目以後にして本年の如きは初日より大に取引あり其取引の有樣は賣者常に門に充滿し數百人の多きに達し頗る雜沓を極む而して各問屋の買入を爲す者は早朝より現品を買入れ午後五時頃に至りて始て計算を能はざるを以て一先退散し更に計算時刻に再ひ聚來計の如何に依り夫〻差異あり賣者金錢の急用あれば即時に現金を渡すも其必要なき者は曾問屋の振出手形を受取るの例なり此手形は長きは四十五日拂、四十日拂及一箇月拂等の差あり

又新絲上市の季節に近けば問屋は海寧、嘉興、南潯、湖州及仁和、餘杭等の各產地に人を出張せしめて現金を以て絲の買入を爲し又一面には客引の如き所業を爲す其產地に於て買出し得るものは曾製絲家の貧困にして直に現金と引替にするものゝみなり又問屋は豫め數多の客船を雇上げ出張者に於て當杭州に販賣する客人を引入れたる時は一同其船に乘込ましめ以て我問屋に送るを例とす其外當地城外欄要の道路には問屋より曾專門の客引を派出し負擔して道を過ぐる者を引きて我問屋に送ることゝ猶ほ上海地方に於て綿花を買入るゝが如しこれ而して此客引は現今大問屋に在りては六七十人を派遣せりと云ふ右の如く新絲上市の際賣出を爲す製絲者は多く其土地の中等以下に位するものにして絲況の如何に拘らず賣出すものなり其上等なるものは假令製絲を了るとも雖も絲況の變遷を窺ひ時機を見て賣放す故に絲問屋は新絲上市後凡そ一箇月除を經過すれば小資產の製絲人は夫〻賣放を了るべし此に至りて始て眞正の買出人を各產地に派遣し大資產家に就き其貯藏の生絲を買入るゝと云ふ

又紹興府地方の產絲地は當地と二錢塘江を隔て直接舟揖の便なきを以て近年に至り當地の絲問屋は何も分店を設け夫々取引營業を爲せり

◉雜報

●蠶業講習所養蠶景況　農商務省蠶業講習所

所養蠶の景況は前號に記載せし如く至極好結果を呈し目下夏蠶の飼育中なるが春蠶に於ける四齡より五齡に至る狀況は左の如し

試驗室蠶兒飼育　本室蠶兒早掃の分は五月二十日、中掃は五月三十日、晚掃は六月二日全く四眠を了れり此間(五月二十一日以降五月三十日まで)に於ける天候は晴天六日、曇天三日、雨天一日にして別に特記すべきものなく而して本齡間に於ける室外溫度は最高八十一度(二十九日)、最低四十九度(二十三日)にして平均六十三度四分を示し毎日の平均は五十六度五分(二十四日)乃至七十度五分(二十九日)の間に在り又濕度は最高百度(二十四日)最低四十八度(二十五日)にして平均七十九度四分を示し毎日の平均は六十七度八分(二十三日)乃至九十一度(三十日)の間に在り室內毎日の平均溫度は六十五度(二十三日)乃至七十一度八分(二十一日)の間に在りて最高七十八度(二十九日)、最低五十八度(二十三日)、平均六十八度二分なり濕度は毎日平均七十六度(二十三日)乃至八十九度一分(三十日)の間を往來し最高は九十四度(三十日)、最低は七十二度(二十三日)、平均は八十三度一分に在り要するに本齡間は氣候適順にして蠶兒生育の經過頗る宜しきを覺えたり本齡に於ける日數を昨年に比すれば早掃の分に於て六時間、中掃の分一日八時間、晚掃の分一日六時間の遲延を見しは室內の溫度之を昨年に比して平均四度嚴の冷涼を示せしがためなり

今早中晚の經過を揭ぐれば左の如し

	早掃	中掃	晚掃
四齡	餘食五月十三日午前四時	同　二十一日午後十一時	同　二十五日正午十二時
	停食五月十八日午後三時	同　二十八日午後一時	同　三十一日正午十二時
	終眠五月二十日午正十二時	同　三十日午前五時	六月二日午後五時

五月三十日中掃蠶の四眠起以降六月十二日晚掃蠶の上簇日に至る天候は晴天七日、雨天三日、曇天四日にして概ね暖氣なりしが六月三日北風冷氣を送り氣候濕潤時に細雨あり引續き曇雨の日二日に彌れり此間蠶座の乾燥宜からず故に給桑に注意し除沙を頻繁にし尙ほ空氣の流通を滑らしむるに力

めしが擲然氣候順に復し快晴の日續きたりし而して早掃は五月二十七日正午を以て悉皆上簇を了り晩掃は六月十二日の上簇とす即ち此間室外温度の最高は八十二度（六月九日）、最低五十六度（六月三、四日）にして平均六十七度七分を示し毎日平均五十七度（六月三日）乃至七十二度三分（六月六日）の間に在り又同濕度は最高百度（六月四、五日）、最低五十九度（五月三十一日、六月一日）にして平均八十四度六分を示し毎日平均は七十三度二分（六月二日）乃至九十六度六分（六月五日）の間に在り而して室内毎日の平均温度は六十三度六分（六月三日）乃至七十六度一分（六月八日）の間に在り最高八十一度（六月八、九日）、最低六十度（六月三日）平均六十九度八分、同濕度は毎日平均七十九度一分（六月八日）乃至八十九度一分（五月三十日）間の を往來し最高は九十四度（六月一、六日）、最は低七十五度（六月十日）、平均八十四度九分なり其今經過を擧ぐれば左の如し

	早掃	中掃	晩掃
五齡	五月二十日正午	同三十日午前五時	六月二日午後五時
上簇	五月二十七日正午	六月六日正午	同十二日午前五時

此五齡中に要せる飼育日數を算するに早掃蠶は七日間、中掃蠶は七日と七時間、晩蠶掃は九日と十二時間にして之を昨年に比するに甲は少きこと一日と一時間、乙は少きこと一時間、丙は多きこと一日と四時間なり尙ほ其總飼育日數を昨年に比すれば左の如し

	本年	昨年
總飼育日數	三十二日と二十二時	三十六日
	三十一日と十一時	三十八日と十八時
		三十二日と五時

傳習室蠶兒飼育　本室本科二年に在りては本齡中室内温度平均六十八度、濕度平均七十九度五分にして五月二十四日午前五時催眠、同日午後十一時停食、同二十六日午後十一時蛻蛻即ち七日五時間にして本齡を了り本科一年に在りては室内温度平均六十八度、濕度平均六十七度五分にして五月二十六日午後五時催眠、同日午後十一時停食、同二十八日午後十一時蛻蛻即ち七日正午十二時停食、同二十九日午後一時蛻蛻即ち七日十五時間にして本齡を了れり今各室とも其經過の概況を左に表示す

八日午後十一時蛻蛻即ち七日二十三時間にして本齡を了れり別科に在りては室内温度平均七十一度二分、濕度平均七十二度九分にして五月二十六日午後七時催眠、同二十七日正午十二時停食、同二十九日午後一時蛻蛻即ち七日十五時間にして本齡を了れり今各室とも其經過の概況を左に表示す

	角又	四齡飼食	催眠	停食	蛻蛻	齡中給桑回數	總給桑量	繭量一匁に對する給桑量
本科二年	小石丸	五月十九日午後六時	同二十四日午前五時	同二十四日午後十一時	同二十六日午後十一時	三十二回	一八六・九八五〇	八・一七九五
本科一年		五月二十日午後十二時	同二十六日午前五時	同二十六日午後十一時	同二十八日午後十一時	三十七回	一八五・三九二〇	七・三〇四五
別科		五月廿一日午後十時	同二十六日午後七時	同二十七日正午十二時	同二十九日午後一時	三十四回	一〇四・六二一〇	七・五四三〇
別科	青熟	五月廿一日午後十時	同二十六日午後七時	同二十七日正午十二時	同二十九日午後一時	三十四回	一〇二・四七三〇	七・五三四〇

本科二年に在りては本齡中室内温度平均七十一度五分、同濕度平均八十度五分にして飼食より七日目即ち六月一日に於て催熟し同三日午前までには悉皆上簇を了れり而して本齡中は七日と十一時にして總飼育日數は三十三日二十三時間なり本科一年に在りては室内温度平均六十九度、同濕度平均八十二度五分にして飼食より六日目即ち六月四日に於て催熟し同五日午後三時悉皆上簇を了れり而して本齡中は七日十七時にして總飼育日數は三十五日四時間なり別科に在りては室内温度平均七十二度八分、同濕度平均八十一度にして飼食より八日目即ち六月五日に於て催熟し同六日午前十時悉皆上簇を了れり而して本齡中は七日二十一時にして總飼育日數は三十四日二十三時間なり尙ほ左に其概況を表示す

	角又	飼食	催熟	上簇	給桑回數	總給桑量	繭量一匁に對する給桑量
本科二年	小石丸	五月廿六日午後十一時	六月一日午前十時	同三日午前十時	三十二回	七一〇・一一〇〇	三一・一七七一〇
本科一年		五月二十八日午後十時	六月四日午前八時	同五日午後三時	三十九回	八九五・二六四〇	三五・二七四三
別科		五月二十九日午後一時	六月五日午前五時	同六日午前十時	三十九回	四七八・〇五九〇	三五・一五一五

別　書熟
郡　五月二十九日午後二時　同五日午前五時　同六日午後十時　三十九回　四八〇・六四七〇　三四・八八〇〇

●支那生絲に就て

大日本蠶絲會員栃木縣安蘇郡犬伏町關根蔡次郎氏は支那生絲の優等なるは果して何に原因すべきや彼國蠶業を視察せる諸先生の報告を拜讀するに凡そ二點の原因あつて存するものの如く愚考せらるゝなり左に之を記して敬を乞はん

(一)支那生絲の要素たる桑は我日本の如く種々なる桑種を飼料に供せず一般魯桑を以て蠶兒を飼育すること(二)支那繭は一切綴れ目なく所謂日本の最下等繭(繭形は崩れたと申樣なる形狀)楕圓にして玉繭の如きもの以上二項は日本と著しく異なる所にして其第一項魯桑一種を以て蠶兒を飼育するは支那生絲の品位を佳良となす一原因ならん乎而して其第二項綴れ目なき繭の種類を飼育するの習慣(元來支那種は綴れ目の出來ぬ種類なるや無經驗なれども)は能く繭の解舒を良くし隨て類節少なき所以にして是亦絲質の品位を佳良となす一原因ならんか將た又種類、氣候、風土の三原因に由れりとせんか試に日本と支那と異なるべき點を示せば則ち左の如し

生絲
- 日本絲
  - 蠶兒を飼育するに種々なる桑を用ふること
  - 繭は少し綴れ目ありて長からず短からぬものを撰繭して之を原種となすは日本古來の習慣なること
- 支那絲
  - 蠶兒を飼育するに一般魯桑を以てすること
  - 繭は綴れ目なき楕圓形なること

想ふに支那種として日本の如き目的を以て年々歳々撰繭然りとす是に由て之を觀れば蠶繭は元楕圓形なるが繭して原種を製せば恐らくは終に日本の如く綴れ目ある繭形に變ずるに至るべし彼の野蠶の營める繭を見るに不規則なる楕圓形にして殆んど今の支那種に於けるが如し抑ゝ家蠶の祖先たる野蠶の繭形は已に天性固有のものなることは敢て論を俟ざるべ盡し支那繭は古來より其天性固有の形狀を持續せしめつゝあるものゝ如く我日本に於ては之に反し少し綴れ目ある繭を其種とする古來の習慣なりしを以て其固有なる楕圓形の繭形を變性せしめて綴れ目ある繭形と爲したるものゝ如し、との問に對し同會技藝委員松永伍作氏は質疑者説明の如くなるべしと思考せりと答へられしと

●横濱生絲檢査所檢査成績（承前）

纖度　纖度檢査は二千〇五十點にして其纖度の最太きものは二十八デニール九四最細き者は八デニール〇二なり而して細太の差最多きものは十九デニール一七（平均纖度十六デニール三六細きは十デニール三八太きは廿九デニール五五）の甚だしき不同なる結果を示せり然れども其差最寡きものは一デニール四三（平均纖度十四デニール二六細きは十三デニール四三太きは十四デニール八六）の少差なるものあり是の如きは檢査生絲中稀に見る所のものにして製造者の用意周到なるを推知するに足る尙ほ其總平均を示さんに細絲は十デニール二六の纖度にして細太の差は三デニール四七、中細は十二デニール二〇にして其差四デニール三五、太絲は十五デニール〇二にして其差五デニール五七なるの成績を示す之を前回半年度の成績即ち細絲は纖度十デニール二七にして細太の差は三デニール二〇、中細は十二デニール三五にして其差は四デニール一八、太絲は十四デニール六六にして其差は五デニール二三なるに比較するに纖度不齊の度は稍〻增進せるも纖度太ければ太きに準じて細太の差も亦從ひて多きを示せる仕前回の成績に異なるなし又檢査生絲中坐繰製の鐵瓶造二十點あり其最太きものの平均纖度は四十七デニール四六なりしが其細太不均の甚だしきものは七十三デニール一一（平均纖度四十七デニール四六細きは二十デニール四二太きは九十三デニール五三）の開きあるを見る然れども本絲の如きは內地需要の粗品にして海外に輸販するもの殆ど稀なるの現況なるを以て敢て喋々を要せずと雖も纖度を揃へて揚返籤に改良を加へなば聲價をして一層高からしむること疑を賭るよりも炯かなり

纖度不齊の多寡に依り細、中、太、三絲に於ける點數を調査せしに其檢査高二千〇五十點の生絲中纖度整齊優等の地位を占むべきものの即ち細太の差二デニール以內に止きるものは僅に細絲に十一點、中細に三點、太絲に二點なり二デニール以上三デニール以內の差にして稍〻優等のもの細絲には百二十八點あるも中細には五十四點、太絲には五十七點に過ぎず而して八デニール以上の差あるものゝ如きは器械製絲には稀有の數に屬すれども尙ほ中細に八點、太絲には百十一點あるを見る是坐繰製絲の檢査加はりしに因る殊に十デニール以上の差は主に鐵瓶絲及打返絲に多しとす

類節　類節檢査は千六百九十點にして其類節の最も

多き部分は實に驚くべきの多數にして大類五十四顆を有するものあり小類二千八百三十二顆（絲長五百メートルに付）を有するものあり又其最寡き部分は大類絶無にして小類も亦僅々六顆に過ぎざるものあり然れども一點に對する平均類（一點に付五百メートルづゝ十回を檢査する）の最多きものは大類二十三顆小類七百三十顆を有し最寡きものは大類絶無にして小類二十五顆なりとす然而して其總平均に至りては大類は細、中、太三絲共に通じて一顆づゝにして小類は細絲百五十三顆、中細百六十八顆、太絲百六十七顆なりしを以て今回も大類を小類に合せ其增減の如何を算定するに細絲に三十六顆中細に二十三顆太絲に四十五顆增加せるを見る然而して纖度太ければ太きに準じ絲條の綜合多きより從て類節數も順次增加するの通例なるは前回の成績に於けると同一なる實績を得たり

絲長五百メートルに有する平均類節の多寡に依り細、中、太三絲に於ける點數を調査せんに其檢査高千六百九十九點中大類絶無のもの細絲に九百點、中細に九十二點、太絲に百八十五點にして全點數の二割二七を占め一顆を有するもの細絲に百九十三點中細に二百點太絲に四百五十一點にして四割九七を占む即ち大類の絶無或は一顆を有するに過ぎざるもの十分の七以上に出づるの其成績を示せり

又小類は其數五十顆以内に止まるもの僅々細絲に四點中細に一點太絲に四點五十顆以上百顆以内のもの細絲に七十九點中細に七十二點太絲に百五十六點にして全く百顆以内に止まるものは全點數の一割八六に過ぎず百顆以上を有するもの却て十分の八以上を占むるが如き不良なる成績を示せり然而して大類の多きものは器械製に寡く坐繰製絲に多しと雖も小類の多きものは之に反し坐繰製絲に寡く器械製絲に多しと雖も小類

強力及伸度　強力及伸度檢査は千九百四十八點にして其中強力の最も強きものは十デニール四〇の纖度にして五十六グラムのものあれども其最乏しきものは十四デニール四五にして四十グラムに過ぎざるものあり又伸度の最多きものは九デニール六八の纖度にして絲長半メートルに付百三十ミリメートル即ち一メートルに付二割六分延伸せるものあれども其最寡なきものは十七デニール二二の纖度にして九十三ミリメートル即ち一割九分ならでは延伸せざるものあり然れども其總平均に至りては細絲は十デニール二六の纖度にして強力は三十八グラム、中細は十二デニール二二の纖度にして四十四グラム、太絲は十四デニール九五の纖度にして五十五グラムを有し其伸度は細、中、太三絲共に二割二分なるの成績を示せり是を前回半年報の成績即ち細絲は十デニール二五の纖度にして強力三十九グラム、中細は十二デニール二二の纖度にして四十六グラム、太絲は十四デニール六六の纖度にして五十四グラム又伸度は細、中、太三絲共に通じて二割に止まるるの比較すれば強力は稍ゝ劣れるも伸度に至りては遙に優等なりとす

（未完）

●蠶業協議會

近來蠶業の隆盛ならんとするに當り各地競て蠶業傳習所若くは講習所の設置あるは喜ぶべきの現象なれども此等の設置增加に伴ひ其操る所の方針は各自其軌を一にせず漸く多岐に亘らんとするの傾向あり斯業の發達上等閑に附すべからざるを以て農商務省にては來る九月十九日より向ふ一週間を期し道廳各府縣の蠶業傳習所若くは講習所の主任及巡回教師其他蠶業の講習に從事する者を會し左の問題に就き協議せらるゝよし

一地方蠶業傳習の方針並に其程度如何

（説明）地方蠶業傳習の事たる各ゝ其情況の異なるあるを以て必ずしも其一轍に出づる能はざるは勿論なりと雖も之が主要の綱目を一にするの必要を認む依て其方針並に程度を問ふ

二地方蠶業傳習所と本省蠶業講習所と互に氣脈を聯通するの順序方法如何

（説明）地方蠶業傳習所と本省蠶業講習所とは互に氣脈を通じ以て夫體の方針を一定するは斯業改良發達上最も必要なるを認む依て其順序方法を問ふ

三地方蠶業傳習所に於ける試驗の設備方法如何

（説明）地方蠶業傳習所に於て施行せる諸般の試驗事項の如きは其地の狀況により素より同じからざるべしと雖も各傳習所幷に本省蠶業講習所の間に於て豫め其設備方法を定め彼我の業務相互に無益徒勞に陷るの不利なからしむるは緊要の事なりと信ず依て其順序方法を問ふ

四地方蠶業傳習所の本省蠶業講習所に對する希望如何

（説明）地方蠶業傳習所の本省蠶業講習所に對する希望は素より多かるべしと雖も就中最も緊要なりとするものを問ふ

五地方蠶業巡回教師と地方蠶業傳習所及本省蠶業講習所との間に連絡を通ずる方法は如何

（説明）地方蠶業巡回教師と地方蠶業傳習所及本省蠶業講習所との間に連絡を通じ互に斯業改良發達の道を計るは最も必要なるべしと信ず現今殆ど此連絡なきは頗る遺憾とする所なり其連絡の方法を問ふ

時節柄最も必要のことなるべし殊に參集の諸氏に望む所は第四項の問題なる本省即ち中央の蠶業講習所に對する希望是なり地方に於て蠶業及試驗事業に於て幾何の差かある地方に於て容易になし得らるゝ事項を中央にて行ひ地方に於て容易になし得ざからざる事項は中央にても亦なし能はずと云ふが如き事情倘しありとせば地方と中央と何ぞ選ばん切に望む參集の諸氏内外の大勢に鑑み滿腔の意見を吐露して苟且偷安者の夢魂を覺破し而して蠶政革新の資に供せられむことを

●人工養蠶の成績

相州藤澤なる人工養蠶傳習所の成績を聞くに其滿より製せし生絲は續節の甚だ多きこと一の缺點なれども其他の點に於ては普通の滿に讓る所なく殊に其飼育期間の甚だ短きにも拘らず絲量の如きも敢て劣る所なしと云ふ抑も此人工養蠶法は溫度の作用により蠶兒の飼育期間を短縮するを目的とするものにして普通の飼育法に依れば三十五六日間を要するの常なるに此方法に依れば二十日間位にて上簇せしむるにあり故に經濟上甚だ利益なるが如しと雖も其實手數を要すること甚しく且つ飼育期間の短き代りに一日の給桑量は殆んど倍額を要するのみならず桑葉の發育よりも蠶兒の發育速かなるが故四眠頃にも尚ほ量目の少き桑芽を給せざるべからざるの不利益ありされば經濟上幾何の利あるやは今尚ほ疑問に屬し單に其收繭及製絲の成績のみにては未だ以て人工養蠶法なるものゝ價値如何を斷定し難しと云ふ

●臺灣の蠶業事績と養蠶の適否

臺灣總督府民政局に於て編纂せられたる殖產報文中同島に於ける既往の蠶業事績及養蠶の適否に就てと題する一項あり左に抄錄す

本島に於て從來養蠶の行はれしや否は一も記錄の徵すべきものなく又事實の致ふべきものなく唯各地の山野及庭園に於て野生桑樹の生々たるを睹るのみ而して晩近の事績としては今より數年前臺北大稻埕に於て養蠶を試みたるものありて蠶種は支那廣東及浙江より取寄せ一ヶ年三、四回の飼育を爲し其成績頗好なりしかども地方事情の斯業に便ならざるものあるが爲め發達の望みなきを信じ僅に二ヶ年にして休止し又有名の富豪林維源は數年前より桑園を開き蠶種は同く之を清國に採り規模稍大なる養蠶に從事すること數年なりしも不幸にして成績不良なりしが爲め竟に絕望の餘り桑樹を掘芟して茶園に變じたりと云ふ蓋曩昔選として攷ふべからずと雖も夫の野生桑の存在せるを以て推測すれば中古嘗て養蠶の本島に行はれしや疑なき能はざるも之が研究は暫く他日に讓り單に晩近の事績に據るも本島に於る養蠶は不幸にして其發達を見るに至らざりしと雖も本島人の業已に斯業に矚目せることは蔽ふべからざるの事實なりとす蓋臺北地方の如き製茶業盛なるの地に在ては周圍丘陵到る處茶樹を主として其他各種植物の栽培せらるゝあれば別に植桑の必要を生ずべき閑地なく且老幼婦女苟も事に堪ふるものは擧て茶業者に雇使せられ其盛季に在ては附近數里の家〻復一人の遊手なきの狀況なるを以て遠に養蠶に從事するものあるも蠶女を備はんと欲すれば勢茶場に到らんとする者を擯止して多額の賃錢を給せざるべからず一般土人も亦業として生計の資るべきものありて空閨に苦むものなきが故に自ら其他を思はざるなり斯る地方的一種の事情は即上に記せる輓近養蠶家として前者の手を敢むるに至りたる唯一の要因なりとす而して其後者に於るも亦他なし本島氣候風土の不良不順なるものは實に渠をして蠶業の難に屈せしめ失敗の餘全く絕望に陥らしめたる一大主因たらずんばあらず而して中古蠶業の今日に繼續せざりしもの亦此等の因由ありしことを想像すべきなり

本島の既往に於る養蠶の事績は實に此の如し今や臺人としては或は養蠶の難を説くものあらんも蠶業の有利を懷ふものはなかるべし切言すれば臺人の腦裏には全然蠶業思想の徵點だも印せざるなり然らば則ち目下の臺灣は絕て養蠶の痕影だも留めざるか否尚一種の氣息奄々として僅に存するものなきにあらず

經濟衒某土人の年々養蠶を爲せる者あり其狀固より見るに足るべきものなく僅に數十頭の蠶兒を小箱内に飼育し厨房の制器具狼藉臭氣紛々たる室内に於て其目的たる亦製絲にあらずして熟蠶の吐絲に依て提灯を製するにあり其法結繭に先ち蠶を捉りて竹骨の上に這はしめ人爲の幇助を加へて厚薄なく吐絲せしめ製工甚だ美なるものあり素是れ玩弄物的手工に蠶兒を利用ずるものにして產業的養蠶として見るべきものにあらずと雖も亦以て蠶兒の飼育し得べきものたることを少數土人の眼底に映ぜむの効なきにあらず況んや又將來本島蠶業の奬勵開發は或は斯の眇たる小養蠶家の脚邊より其祖程を發せんも亦測り難きに於てをや其飼育の不完全極まれるにも係らず比較的病蠶僅少にして結繭に至るを目擊し將又本年試育成績の彼が如きを以て見れば本島に於ける養蠶業は上記二者の絕望せるが如きものにあらずして將來奬勵開發の望なきにあらざるを知るべきなり憶ふに養蠶地としての適否に主要の關係を有するものは寒溫の變化と乾濕の調和とにあり是を以て本島の氣候風土彼の如くなるを見て直に養蠶不適地なりと見做すもの少からずと雖も之に十分の注意を加ふるに於ては本年試育の如き決して成績不良なりと稱すべからず況んや臺北は本島中最も寒溫定りなく濕潤甚しき地方なりとすれば之に勝ることの數等なる南部

地方に於ける養蠶の好望なること轉た想ふべきなり尚同地方に就ては他日精確なる調査を經て必ず此豫察の違はざることを證するの期あるべし

臺北地方茶業の盛なるがため蠶工の需用に困難なること實に上記前者の中廢せし要因に一なるも之が救濟の策なかるべし然るに南部地方は之に反し婦女は慣ね常職なきを以て敢て此等の障害なかるべし元來本島の婦女は纏足の習慣ありて劇しき勞働に堪へざるも手工に至りては其長技とする所にして頗る巧妙なるを以て養蠶製絲の如きは渠等に最恰好の職事たるべし要するに氣候其他の關係よりして本島の養蠶は南部を以て適當地となすべきに似たり桑樹は島内各地の山野又は田圃の周畔に於て點々野生せるを見るに其種類は内地野生のものと全く相異りて優等なり若し桑園を拓て苗木を養成し之に適當の培養を施さば必ず内地園桑に比するも多く讓らざるの良桑を見るに至るべきなり又内地種の果して本島の土質に適するや否は未だ詳細の實驗を經ざるを以て確言する能はずと雖も昨年鹿兒島産の桑苗を試植したるものの其發育佳良なるに依て見れば亦必ず有望なるべきを信ずるなり而して其孰れの途を擇ぶも本島養蠶の上には敢て桑葉の缺乏を憂ふることなかるべきなり

●傳習生募集試驗　農商務省蠶業講習所本科傳習生五十人の募集試驗は本月中各地方廳にて施行せらる其科目は算術金體、動植物理化學、養蠶法等なり

●蠶業に關する豫算　帝國議會の協賛を經たる明治三十一年度歳入歳出總豫算追加は六月十八日の官報を以て公布せられしが其歳出中蠶業に關するものは農商務省所管中に蠶業講習所講習及試驗費金參千七百拾圓、蠶種檢査費補助金拾萬參百八拾九圓四拾六錢五厘、北海道廳蠶種檢査費金四千五百貳圓五拾參錢五厘の三項なり

●檢査費と奬勵金　大藏大臣は第二豫備金支出第一回（五月十一日）蠶種檢査費金千九百貳拾七圓又同第二回（六月四日）生絲直輸出奬勵費金貳千百貳圓五拾錢豫算外支出の儀主務大臣の請求に同意を表し勅裁を經たる旨夫々官報に掲げられたり

●蠶兒生育景況　京都府外一府二十九縣に於ける本年蠶兒の掃立より三齡に至るまでの景況は左の如し

府縣名	掃立の初終	掃立枚數の增減	桑葉の養惡	收繭の豫想
京都	四月下旬より五月中旬	一割餘增加	良好	過不足なし
大阪	四月下旬より五月上旬	減少	良好	增收
神奈川	四月下旬より五月上旬	減少	良好	不足なし
廣島	四月下旬より五月上旬	減少	善良	過剩
山口	四月中旬	差なし	佳良	過剩
和歌山	四月下旬より五月上旬	減少	佳良	過剩
鳥取	四月下旬より	增加	不良	不足なし
香川	四月下旬より	減少	稍々減少	佳良
高知	四月下旬	減少	稍々減少	佳良
福岡	四月中旬より	減少	良好	過剩
大分	四月中旬より五月上旬	增加	佳良	過剩
佐賀	四月中旬より五月上旬	減少	稍々惡	過剩
熊本	四月中旬より	一割餘增	佳良	過剩
鹿兒島	四月上旬より	增加	良好	過剩
兵庫	四月下旬より五月上旬	稍々減少	良好	十分
長崎	四月下旬より	稍々減少	善良	過剩
埼玉	四月下旬より	減少	善良	不足なし
群馬	四月下旬より	減少	佳良	不足
栃木	五月中旬より	減少	佳良	不足
奈良	四月下旬より五月下旬	減少	佳良	稍々過剩
三重	四月中旬より	增	善良	稍々不足
愛知	四月下旬より	減少	善良	增收
靜岡	四月中旬より	差なし	好良	過剩
山梨	四月下旬より五月上旬	減少	佳良	稍々不足
岐阜	四月下旬より	減少	佳良	稍々不足
宮城	五月上旬より	減少	佳良	稍々不足
長野	五月上旬より六月上旬	二割減	佳良	稍々不足
福井	五月上旬より同月中旬	減少	良好	稍々不足
鳥取	四月下旬より五月上旬	差なし	善良	增收
島根	四月下旬より五月中旬	減少	佳良	過剩
岡山	四月下旬より五月上旬	減少	善良	過剩

府縣名	掃立の初終	掃立枚數の增減	桑葉の養惡	收繭の豫想
兵庫	四月下旬より五月上旬	稍々減少	良好	十分
長崎	四月下旬より同月下旬	稍々減少	善良	過剩
埼玉	四月下旬より	減少	善良	不足なし
群馬	四月下旬より	減少	佳良	不足
栃木	五月中旬より	減少	佳良	不足
奈良	四月下旬より五月下旬	減少	佳良	稍々過剩
三重	四月中旬より	增	善良	稍々不足
愛知	四月下旬より	減少	善良	增收
靜岡	四月中旬より	差なし	好良	過剩
山梨	四月下旬より五月上旬	減少	佳良	稍々不足
岐阜	四月下旬より	減少	佳良	稍々不足
宮城	五月上旬より	減少	佳良	稍々不足
長野	五月上旬より六月上旬	二割減	佳良	減收
福井	五月上旬より同月中旬	減少	良好	稍々不足
鳥取	四月下旬より五月上旬	差なし	善良	增收
島根	四月下旬より五月中旬	減少	佳良	過剩
岡山	四月下旬より五月上旬	減少	善良	過剩

府縣名	掃立の初終	掃立枚數の增減	桑葉の養惡	收繭の豫想
千葉	四月下旬より五月上旬	減少	善良	過剩
福島	四月中旬より同月下旬	差なし	佳良	過剩
茨城	四月下旬より	減少	善良	過剩
栃木	五月中旬より	減少	佳良	過剩
群馬	四月下旬より	減少	佳良	過剩
埼玉	四月下旬より	減少	佳良	過剩
千葉	四月下旬より	減少	善良	過剩
福島	四月下旬より五月上旬	減少	善良	過剩
茨城	四月下旬より	減少	佳良	過剩
栃木	五月中旬より	減少	佳良	過剩
群馬	四月下旬より	減少	佳良	過剩
埼玉	四月下旬より	減少	佳良	過剩
千葉	四月下旬より	減少	善良	過剩
福島	四月下旬より五月上旬	減少	善良	過剩
茨城	四月下旬より	減少	佳良	過剩
栃木	五月中旬より	減少	佳良	過剩
群馬	四月下旬より	減少	佳良	過剩
埼玉	四月下旬より	減少	佳良	過剩
千葉	四月下旬より	減少	善良	過剩
福島	四月下旬より五月上旬	減少	善良	過剩
茨城	四月下旬より	減少	佳良	過剩
栃木	五月中旬より	減少	佳良	過剩
群馬	四月下旬より	減少	佳良	過剩
埼玉	四月下旬より	減少	佳良	過剩
千葉	四月下旬より	減少	善良	過剩

●蠶種檢査請求切手　蠶種製造家より檢査手數料を納付するには金庫へ現金を拂込み其領收書を以て檢査を請求すべき筈の處金庫に遠隔の地方にあつては頗る困難を感ずるやにて栃木縣に於ては今回其便利を計る爲め手數料切手（即ち郵便切手の如きもの）一圓（赤色）十錢（紫色）二錢（青色）五厘（緑色）一厘（黄色）の五種を調製し之を各町村役場に配布し置くことゝなし七月なるにより製造家は其役場に就

き手數料に相當する切手を買受け檢査願書に貼用し檢査を請求することを得らると云ふ

●岩手縣の蠶業奬勵　本縣廳にて蠶絲業者の誘掖奬勵に勉められつゝあるは余輩の感佩する所なり先年繭の乾燥並に殺蛹視察として勝業課員を各府縣に派し調査の結果本年度に於て該二法及共同揚返場設置奬勵費として各郡市に二百圓宛の補助金を下付する事となり我二戸郡にては福岡、一戸の兩町に設立の筈にて目下建設中なり（近藤傳八郎氏報）

●山口縣繭共同購入所　縣下二三製絲場の休業と例年他縣より入り込む製絲場一二休業との影響は一般價格の低廉を示し機に乘じて奸商の壟斷となり果ては養蠶家の嘆聲を聞くのみにて斯くて將來斯業發達上の大障碍なちんと大に憂慮し蠶絲業取締所長中村正路氏は他に二三の同志と謀り養蠶家の救濟策を講じ縣下萩に一大繭購入所を設立し熱心誠實其購入に力めつゝありしが夫かゝらぬか繭價格頓に騰貴し（割合上）同氏の蠶絲業に於ける他まで熱心にして縣下の識者は氏が此一大美擧を贊し誰か感嘆せざるものなしと

●桑苗配付　北海道廳に於て昨三十年中養蠶奬勵の爲め配付せし桑苗は四萬千四百本にして内一萬二千本は同廳所屬札幌蠶業傳習所に於て其他は同上

●蠶業談話　高知縣高岡郡仁井田村、新荘村にては此程蠶業老練家なる田村忠誠氏を招待して養蠶談話會を開きしに氏は斯業の要件に就て懇々談話を爲し又質問に對しては一々詳細なる說明を爲し滿座感服せざるなしと

●實習報告式　靜岡縣濱名郡蠶業學校に於ては六月七日第一回實習報告式を擧行したり今其概況を記せんに表門の上に高く蠶龍に蠶繭を敷き周圍は折屏を以て裝ひ繭を以て「迎賓」の文字を顯はせる一大額を掲げて國旗を掲げ數百の球燈は蠶室事務所の屋上より長く地上に垂れ事務所を知事等の休憩所となし此處には成繭其他參考品を陳列し其他の來賓休憩所には剝桑場を充て此處には陳列品の外に飼育に關する諸種の統計表を掲げ十數個の顯微鏡下には種々のプレパラートを裝置して來賓の隨意觀覽に供せるが如き如何にも注意の周到なりしを知るに足れり式場は蠶室を以て之に充て其正面には幔幕を張り繭を以て「報告式」の字を顯はしたる額を掲げ時を得顏に咲き匂へる五月苑の花壇と相對して演壇を設けたり當日の來賓其他無慮二百餘名に達したるも唯遺憾なりは本縣廳より一人の官吏臨席なきことなり式は午前十一時より擧行せられ青沼濱名郡長報告式を擧行するの式詞を述べ次に宮原校長は實習の報告を爲し次に田代、古山の兩縣會議員、中村濱松町長、高橋芳川村長の演說祝詞あり鈴木濱名郡書記は各地より寄せられたる祝詞及電文を朗讀し最後に毛利教諭の講話あり之にて式を終り酒肴及赤飯の饗應あり其間打ち上たる數十發の烟火は只興を助くるに止まらで本校名譽の發揚と見るを得べし而して來賓の全く散じたるは薄暮の頃なりき

●校長の報告教諭の講話　前項に記する靜岡縣濱名郡蠶業學校第一回實習報告式に於て校長宮原忠正氏の報告及教諭毛利正雄氏の講話の大要は左の如し

宮原校長の報告　（摘要）本年の初蟻蠶は五十六匁十一して最適務有より調育依囑の支部七箇、生絲檢査所員より從來の佛蘭西三種其他二三の試驗育を爲ぜり實却したる繭の價は金四百圓八餘は種繭及參考品として本校に備へ置けり試驗の分は目下調査中なるものありしに拘らず蟻蠶一匁の取繭三貫目以上の良結果を聽けるものは主任教員、生徒奮勵の結果なり底繭の品位は最高級一貫目四圓四拾五錢層繭を併せて尚一貫目三圓五拾錢に相當す實習中の詳細は參考品陳列所に委記するが如くなれば追て一冊の報告書となし諸賢に供すべし敢て諸君の貴臨を辱うしたる為謝す云々

毛利教諭の講話　（抽要）本年度本校の實習は職員生徒協力注意を爲しそれに加へて氣候適順なりしを以て本日の業績あり式を擧ぐるに至れり但當地方養蠶家の留意すべきは當地方は過剰多なれば防遏の手段を施すべきことこれなりは排氣孔を大にし除沙を數々し蠶座に雜物を撒布し糞尿を焼て此等の手段を怠る當業者間に實行せられ居るやと云ふに未だ然らざるが如し當地方は實に天賦の養蠶地なりと言ふを憚らず路種の何れを論じ苟も此地方に生まれたる本校は未だ將年なりと雖も豈所期なくして可ならんや即天賦の地に雄飛すべき實業家を造り出だし以て本業の改良發達を謀るに就きては素と乏しき力ながら力を盡さん然れども本校の組織上より云へば子弟の力に負ふたる一分子に過ぎず希くは世の有力諸君即來賓諸君の賛贊を望むで止まず云々

●原種用蠶種の下付　秋田縣簡易農學校に於て製造の蠶種は原種用として一反歩以上の桑園を所有し毎年三十枚以上の販賣用蠶種を製造する者に限り無代にて之を下付し其配付を受けたる者は翌年成績表に成繭を添へて該校へ送付することに定められたりと

●谷子爵夫人の養蠶熱心　東京市少谷なる谷子爵の邸内には桑園及養蠶室の設けありて數年來蠶見の飼育に從事せらるゝことなるが本年も亦自家製製蠶種小石丸、鬼縮を始めとして西ヶ原蠶業講習所製角又及京都府大雲社北海道支部製造の大雲丸等を飼育せられ共に良好の結果を收められたり殊に令夫人の斯業に熱心なる質素樸裝下婢及雇婦を監督して壹夜の間なく自ら飼育の任に當らる飼育中子が參觀したる時の如き懇ろに說明の勞を執られ且つ從來の經驗談及斯業に關する質問等ありき近來貴族間に此擧あるは實に慶すべきことにて一は當業の奬勵と

なり一は質素の風美を涵養するの毎龜鑑と云ふべし（在西ヶ原松下書三胡氏報）

●**製絲場の教誨**　東京府下八王子町の萩原製絲場にては工場規則中に毎月數回高德を招待して工女教誨を開き休日又は夜間に工女の教育を施行す、工女は故なくして教誨及教育場に缺席すべからずと の規定を加へ場内に教務の一課を置き本派本願寺より教師の派遣を請ひて之を行ひ又夜間は教育を施すにより五百餘名の工女は孰も晝は業を勉め夜は各〻志す所を學び漸次其効驗ありと云ふ場主萩原彦七氏は實業に勵精し衆民の模範たるを以て曩に官旗綬章を賜ひし人なるが福羽子爵が氏の製絲場にてよまれたる歌あり「つとめつゝなりにしきみがいとゝりばくにのとみをもひきいだすらむ」

●**同伸會社の組織變更**　横濱同伸會社にては從來の株式組織を改めて合資會社となすの議ありとは豫聞する所なるが六月十五日に開きたる株主臨時總會に於て愈〻同社全部を擧げて高木三郎、丸山孝一郎、德江八郎、上野照道、林鶴太の五氏に賣渡すの議を決し爾來同社の解散幷に合資會社組織の手續方法に附きて種々協議中なりと尚は聞く所によれば同社の業務は右解散の手續中と雖も依然繼續し且つ同社は一旦右の五氏に賣渡したる後五氏は業務擔當員となりて無限の責任を負ひ自今一層業務の擴張を圖り他の株主諸氏は依然有限社員として同社へ加入するなりとか

●**歌訪の製絲開業**　信州諏訪郡の製絲家は同業者規約に依り六月廿日より遍宇開業したれば久しく汽笛の聲を聞かざりし潮時の周圍は俄に何となく景氣附きたるが如し尤も中には準備行屆かず廿五日頃より開業せしものありと

●**製絲工女の爭奪**　信州諏訪の製絲家中には金融の逼迫等により釜數を減じ隨て工女の供給潤澤なるべき筈なりしが夏期に際し急に遣繰算段を回らし小製絲家の開業するもの多く爲に工女の供給俄に拂底を告げ其爭奪甚しきに至れるを以て各製絲家とも其防禦に汲々たりといふまたしても

●**高知縣の蠶業**　同縣下の蠶業は昨年までは飼育者頗る多かりし爲に往々桑葉不足の聲を聞きしが本年の春蠶に就ては大に飼育者を減じたり畢竟近年絲價の好況なりしを以て無經驗者も俄に蠶具を買入るゝ拵素人養蠶家の俄に增加せしものが一朝絲價の下落に因り利益の薄くなりたるゝ共に是等素人養蠶家の大半は廢止したるに反して故に本年の養蠶家は經驗家のみなりしを以て氣候適順ならざるも經驗家の腕前として難關を打拔けたるを以て一般の成績良好なるを得たり故に本年春蠶の掃立は昨年に比し一割五分の減少なるも收穫は四割の增收なり又昨年中の製絲產出は二千梱なりしが本年は三千梱に至るべし又品質は不揃の嫌ひありしも補助規定實施により品質を一定し聯合取締所に於て受檢の上補助金を供するにより將來益〻面目を改むるに至るべしと

●**檜原村の蠶況**　東京府西多摩郡檜原村にては本年蠶兒發生の頃は氣候適順にして此儘經過せば平年より幾分か好況ならんと豫想せしに五月十五、六の兩日降霜あり被害全村に亘らざるも被害の處は名狀すべからざるなり（某社より出張の教授員は空く歸りたるものあり）然るに經過宜しく蠶兒は減少せしも）きに五齡盛食期上簇に際し梅雨引續き北風寒く濕氣を增すこと常ならず給桑一日二回位にして一葉列べるも食了せず火力に溫度を補ひ濕氣を排除せんとするも及び難く爲に病蠶を生じ其困難一方ならず然るに成進社員は教授員小作八太郎氏の出張を請ひ掃立は五月四日より十日に至り結了上簇は六月四日より入梅前九分通にして着々歩を進め幸に好果を得たるものゝ如し先づ本村の收繭は平年より四割乃至五割減ならん（岡部產左衛門氏報）

●**紙製櫛枕の嚴禁**　試枕又は枕量と稱して紙製の櫛枕を使用するの禁を犯して奇利を壟斷せる者多きにより茨城縣にては縣令を以て是等の器及び類似の器物を使用する者に對しては二圓以上十圓以下の罰金を科することゝなしたりと

●**殺蛹場の建築**　宮城縣牡鹿、桃生、遠田の三郡にて新築中の殺蛹場は孰も近々中に落成すべきを以て本年よりは繭の檢査等をも十分に爲すを得べく又養蠶家の之を見習ふて建築するもの續々あるべしと東北新聞は報ぜり

●**峯村喜藏氏**　山形縣米澤市及南置賜郡の有志者は氏が多年同地蠶業の爲め盡瘁せられたるの誼意を表彰する爲め左の謝狀に銀杯一個を添へて贈りたりと云ふ

本縣下南置賜郡蠶業學校創設多端の際内に生徒の養成を總篤にし外は原業の發達を謀り市郡の別なく到處蠶業の講話に飼育の實地を指導せられ且つ米澤蠶絲會の及ばざる所を援助せられ蠶業上の複雜勢頗る面目を改めんとするに至れり是れ畢竟貴下誘掖の苦果恐銘せざるべけんや蔑くは地方の爲め益〻基礎せられん事を望む銀杯一個を呈し以て聊か謝意を表す

●**中村正路氏**　氏は山口縣蠶絲業家の泰斗にして二十有餘年間一日の如く熱心精勵寢食を忘れ斯業の爲め誘掖奬導し同縣蠶絲業の今日を成せる氏の力與つて其重きを致すは斯業に從事するものゝ洽く知悉せる所なるが蠶絲業取締所設置以來推されて其所長となり滿期に至るも尚は縣下の推す所となり其職を重ぬる再四現に勤續して今其職にあり氏は宏大なる蠶室と數十町歩の桑園とを有し例年原紙三四十枚を收蠶し汎く氏の門に集まる數十名の爲め懇切丁寧

學理に實習に氏自ら教授の任に膺り日夜孜々生徒も亦奮勉して本年も四十有餘石の良繭を收ためり且つ各種の試驗爲をし研究の資に供し大に改良發達を計ると共に製絲場を興して製絲の改良を圖る等氏の如きは實に蠶絲業海有數の人と云ふべし因に記す斯業修得の爲め渡來の朝鮮人數名あり

●增子德之助氏　元愛媛縣蠶種檢査員養成所生徒一同は同所長兼教授たりし同縣技手增子德之助氏に感謝狀に花瓶二個を添へて贈りたり近來兎角教師と學生との間柄に面白からざる感情を生じ易きときに際し斯る美擧あることは聊他の學生の模範となり又增子氏の名譽なるべし其感謝狀は左の如し

（高須賀宇內氏報）

生等先生の厳陶を仰ぐ拙に三旬日漸く其道を窺見し得る所以のものは一に先生の懇篤周到なる教授に接すればなり之れ皆先生の偏にて實に講習生の私すべきものにあらず宜しく廣く當業者の倣に其利を分つべき所のものなり是を以て敢辭止むなく聊か感謝の微意を表せんが爲め拙に花瓶二個を呈す冀くは受領せられんことを

●井上卯太郎氏　氏は本年廣島縣沼隈郡養蠶傳習所に招聘せられしが教授上懇篤周到至らざるなく爲めに生徒以外の傍聽者頗る多く而して蠶見播立以來三齡頃迄は氣候甚だ不順にして一般當業者は多少失敗の傾きあるにも拘らず同所の蠶見は飼育法其度に適し經過良好にして收繭の多き品質の佳良なる縣下十五箇所の傳習所及一般に於ても其比を見ざるの好成績を得地方蠶業の模範たらしめ斯業改良の必要を當業者に感ぜしめたるは氏の鋭意業務に從事せしと學理應用の宜しきを得たるの致す所なりとて生徒一同は氏に感謝狀に地方の特產物を添て贈りたりと云ふ

●小西才藏氏　氏は本年蠶業講習所の紹介を以て長崎縣養蠶傳習所教師に招聘せられしが西彼杵郡長松永俊重氏より左の如く謝狀を贈られたりと

本郡養蠶傳習所教師聘用中日夜勉勵教授熱心にして結果良成績を得本業改良發達の實を奏し將來勸奬上大に影響を及ぼし其功勞不尠依而茲に改表彰候也

●生絲檢査所生絲檢査調　横濱及神戸の生絲檢査所に於て內外生絲貿易商及地方生絲製產者の請求に應じ檢査を施行せられしもの左の如し

▲横濱生絲檢査所の部（五月中）

檢査請求項目	器械	繰糸	計	檢査請求人員 內人	外人	計
原量、正量、再繰、繊度、類節、強力、伸度	三	一	四	四	—	四
再繰、繊度、類節、強力、伸度	四九	四	五三	八	三	二
再繰、繊度、強力、伸度	七	—	七	二	二	二
再繰、繊度	九	—	九	一	—	一
繊度	一	—	一	二	—	二

檢査請求項目	器械	繰糸	計	檢査請求人員 內人	外人	計
繊度、類節	七	—	七	二	—	二
合計	九	一	一〇	三	一	四

（六月中）

▲同

檢査請求項目	器械	繰糸	計	檢査請求人員 內人	外人	計
原量、正量、再繰、繊度、類節、強力、伸度	七	—	七	三	—	三
再繰、繊度、類節、強力、伸度	一四三	五	一四八	二五	二	二五
再繰、繊度、強力、伸度	一四	—	一四	一	—	一
再繰、繊度	三	—	三	一	—	一
繊度	一六	—	一六	二	—	二
合計	一九四	五	一九八	三〇	三	三三

▲神戸生絲檢査所の部（四月中）

檢査請求項目	器械	繰糸	計	檢査請求人員 內人	外人	計
再繰、繊度、類節、強力、伸度、練減	二	—	二	一	—	一
再繰、繊度、類節、強力、伸度	九	—	九	三	—	三
合計	一一	—	一一	四	—	四

又横濱生絲檢査所に於て生絲直輸出奬勵法に據り生絲輸出者の請求に應じ五月一日より同十九日まで檢査を施行せられたるもの合計器械製絲百二十二俵にして內合格せしもの三十六俵なり

●大里忠一郎氏の訃音　夙に製絲の改良を圖り信州松代なる六工社長たりし大里忠一郎氏は六月七日病歿せられたりと國家の爲め痛惜に堪へざるなり

●船津傳次平氏逝く　大日本蠶絲會技藝委員たりし非藏農事試驗場技師正七位船津傳次平氏は六月十五日鄰里群馬縣勢多郡富士見村に於て逝去せられたるに由り大日本蠶絲會幹事長より左の弔詞を贈りたり

大日本蠶絲會技藝委員船津傳次平氏の長逝を悼み余は大日本蠶絲會を代表して恭しく弔詞を呈す

●褒章下賜　大日本蠶絲會特別會員富山縣橋爪治郎作氏は賞勵局に於て左の通り絲綾褒賞を下賜せらる

富山縣越中國婦負郡八尾町　橋爪治郎作

資性篤實夙に雜業を紹で力を蠶絲の改良染圖の開拓に致し傳習所を建て生徒を教養し新式蠶室を築き溫育法を創め改良桑園織機を同業に布ち資金原繭を貸し以て絲品を均齊し始めて八尾生絲の名を世に博し更に進て蒸汽製絲場を起し風雨に曝ふも屈せず實財を投じて惜まず遂に居町地方の一大物產と爲るを致す洵に實業に精勵し業民の模範たる者とす仍て明治十四年十二月七日勅定の綾綾褒章を賜ひ其善行を表彰す（五月二十六日）

●叙任及辭令

任福島縣蠶業學校教諭（六月二十八日）

四級俸下賜　農事試驗場技師　池田鎭次郎
七級俸下賜　農商務技師　澤野淳
　　農商務技師　桑原章藤
　　生絲檢査所技師　高橋信貞
八級俸下賜（以上六月二十八日農商務省）
六級俸下賜　農商務技師　青山元
十級俸下賜　蠶業講習所技師　大林雄也
　　農事試驗場技師　堀正太郎
十一級俸下賜（以上六月二十九日同）
　　福島縣蠶業學校教諭　池田鎭次郎
年俸七百八十圓下賜（六月二十八日福島縣）

●會員諸件

左の諸氏は六月上旬より同三十日に渉りて入會若くは死亡せられたり

▲入　會

○通常會員

東京　若林時之助　同　長崎高野小源次
神奈川　北村桂造　同　玉木貞方嘉吉郎
兵庫　上坂清藏　同　木村九藏
長崎　宮崎九八郎　同　田邊鄉九郎
同　三浦歳藏　同　中井俊一
同　雪浦幾太郎　同　飯高與市
同　神保雄藏　同　田村藤五郎
同　栗林美一　同　森庄五郎
同　武藤貞太郎　同　櫟木櫻井謙吉　同　靜岡深田八百吉
同　内木喜平　同　澤戸準藏
同　三重稻垣久吉　同　成岡半五郎
同　靜岡池谷想作　同　大村万藏
同　佐野彦太郎　同　古山多三郎
同　鈴木秀次　同　内田恒平
同　朝倉五平　同　松本八郎
同　吉田彌十郎　同　岐阜山田松吉
同　青木政吉　同　石川齋藤文治
同　鈴木豐吉　同　宮山小塚家世
同　川井林平　同　秋本重治
同　安立能登次　同　高知多田祐助
同　石岡兵三郎
同　中村嘉一郎
計四十三名

右の内にて著林、木村、田邊、中井、内木、多田の六氏は各自に申込まれ北村氏は吉澤雄氏。上坂氏は長谷川源一氏。宮崎氏は橋本亮氏。三浦氏及玉木五氏は川倉藤次郎氏。飯島氏は瑞彩驚報氏。田村氏は益田子之吉氏。森、武藤の二氏は近藤原太郎氏。櫻井氏は由井粹次氏。稻垣氏は伊藤小左衛門氏。池谷氏及以下十六氏は毛利正雄氏。松本氏は四道支會。山田氏は中野俊太郎氏。齋藤氏は森成次郎氏。小塚、秋本の二氏は齋藤善太郎氏執も紹介せられたり

▲死　亡

○特別會員

群馬　船津傳次平

○通常會員

宮山　井澤半兵衛

●會員諸件

左の諸氏は六月上旬より同三十日に渉りて入會若くは死亡せられたり

▲入　會

○通常會員

東京　若林時之助　同　長崎高野小源次
神奈川　北村桂造　同　玉木貞方嘉吉郎
兵庫　上坂清藏　同　木村九藏
長崎　宮崎九八郎　同　田邊鄉九郎
同　三浦歳藏　同　中井俊一
同　雪浦幾太郎　同　飯高與市
同　神保雄藏　同　田村藤五郎
同　栗林美一　同　森庄五郎
同　武藤貞太郎　同　櫟木櫻井謙吉　同　靜岡深田八百吉
同　内木喜平　同　澤戸準藏
同　三重稻垣久吉　同　成岡半五郎
同　靜岡池谷想作　同　大村万藏
同　佐野彦太郎　同　古山多三郎
同　鈴木秀次　同　内田恒平
同　朝倉五平　同　松本八郎
同　吉田彌十郎　同　岐阜山田松吉
同　青木政吉　同　石川齋藤文治
同　鈴木豐吉　同　宮山小塚家世
同　川井林平　同　秋本重治
同　安立能登次　同　高知多田祐助
同　石岡兵三郎
同　中村嘉一郎
計四十三名

右の内にて著林、木村、田邊、中井、内木、多田の六氏は各自に申込まれ北村氏は吉澤雄氏。上坂氏は長谷川源一氏。宮崎氏は橋本亮氏。三浦氏及玉木五氏は川倉藤次郎氏。飯島氏は瑞彩驚報氏。田村氏は益田子之吉氏。森、武藤の二氏は近藤原太郎氏。櫻井氏は由井粹次氏。稻垣氏は伊藤小左衛門氏。池谷氏及以下十六氏は毛利正雄氏。松本氏は四道支會。山田氏は中野俊太郎氏。齋藤氏は森成次郎氏。小塚、秋本の二氏は齋藤善太郎氏執も紹介せられたり

▲死　亡

○特別會員

群馬　船津傳次平

○通常會員

宮山　井澤半兵衛

すれば殆ど六十五萬個の巨額なる産出あるものと云ふべし實に盛なりと云ふべきなり

製絲業　江蘇、浙江の兩省に於ける洋式器械製絲業の起原は甚だ遠からず從來にありては悉く養蠶家各自の製造せしものにして其器械は大枠直揚げ二口取若くは三口取にして其枠の寸法は一樣ならず大なるものに至りては一丈を超へ小なるも六尺に降らず而して養蠶家は曾殺蛹乾燥等のことを知らず生繭中に於て繰絲する習慣にして悉く發蛾前に於て繰製し終らざるべからざるの必要あるが故に一家族中勞働に堪へ得るものは男女老少に係はらず暴て之に從事せり

製造法は地方に由り幾分の差異あり其稍精密なるものにありては七八顆の繭を着け本邦坐繰製絲の如く丁寧に繰製するものありと雖も粗雜なるものに至りては始め大約二十顆の繭を着けて繰り繭數の漸次落減して五六顆となるに及び始て再び緒を求めて之を添着すること復た元の如く二十顆位にして繰絲するなり而して繰絲中絲縷の切斷することあるも互に相結び着くることなく直ちに枠に巻き揚ぐるもの多し其の粗雜なること實に驚くに堪へたりと云ふべし故に斯の如き生絲は官に其絲縷の不均一なるのみならず絲緒を運繋せざると絡交束裝の不整理なる等に由り機業家が之を再繰するに當りては非常なる煩勞と時間とを徒費せざるべからずして且つ絲層の生ずること亦甚だ多量ならざるべからず之れ清國當來製の生絲が洋式器械製生絲に比し甚だ安値なる所以なりとす然るに今を距る大約二十年前上海港に一の洋式器械製絲場の起りたるを嚆矢とし以來逐年其數を增し來りしが二十七八年日清戰役の結果馬關條約締結後に於ける增加は殊に著るしく現今上海及蘇州杭州等に於て開業せるもの實に三十六箇所の多きに至れり而して十中の六七は二十八九兩年の開業にして創立日尚ほ浅きも相應の利益を得るもの多く大概一担（百斤）に付八十兩乃至百兩（一兩は我一圓三十五錢乃至一圓二十錢爲換相場に由り差あり）の割合なりと云ふ其組織は株式會社あり合資會社あり又は個人の起業なるありと雖も工場の構造機械の形式等に至ては概ね佛國制新式のものにして悉く一定せり即ち大枠直繰器械にして二釜に付一個の煮鍋を設け一釜に五條乃至六條の絲を繰る法なり（此器械建設の費用は一釜に付安きは四十五兩高きは八十兩にして工女一人の繰絲高は巧拙を平均し其繭なれば一日百匁粗繭なれば六七十匁位なりと云ふ）今左に各製絲所に於ける要項を摘記して參考に資せん

各製絲所は重に外國の直接注文品を製造す、繭は概ね江蘇省無錫地方より購入すれども又浙江省紹

輿地方より購入するもあり、繭は紹興産を最良とし四百斤にて百斤の絲を得べく無錫地方の産は四百五六十斤乃至五百斤以上を要すと云ふ、繭は一等二等三等に撰別して繰絲す其撰別は繭綿を除去する際同時に之を行ふ、製絲用水は河水或は水道の水を使用すれども河水を濾して用ふるもの多し是れ泥水なれども其質佳良にして且つ廉なるが故なり、石炭は百五十釜の工場にて一日三噸を用ふと云ふ、生絲一担（百斤）の製造費は百兩内外なり、工女の賃銀は食料自辨にて一日十錢より三十錢までとす、繭の解舒は良好にして四顆或は五顆を附け十一デニール前後の絲を得るなり、生絲は其光澤鮮白美麗ならざるも品位は良好なり、生絲は大約十匁位を一綛とし六十綛を以て一括となす

右は上海に於ける製絲業の概況なり尙ほ實昌洋行の情況を叙すれば同行は佛人の所有にして扱位にあり其釜數五百四十四個を備へ器械は伊太利鳳六口取クンチル式直繰器械にして建設費は一釜に付六十五兩乃至七十兩汽鑵は十馬力にして一日の石炭消費高八噸監督工女伊太利婦人三人佛蘭西佛人三人あり他は曾清國婦人なり而して使役する工女の總數等を擧ぐれば

繰絲工女五百四十四人、口立工女二百七十二人、撰繭工女三百二十人、監督工女六人、其他雜役百五六十人合計千三百人にして其工女募集地は多くは上海附近なるも寧波地方より來るもの二三分あり、勞働時間は十時期にして朝六時より夕五時半に至る（但し午食等に一時三十分間を要す）工女の患者割合は夏期は百に對し三十に及ぶことあるも冬期は百に對する五位なり、製絲は一等繭にて細絲（十デニール中位）を製し二等繭以下を以て太絲（十三デニール中位）を製すと云ふ

製絲所の中には官立あり民立あり或は半官半民の如き性質のものあり湖北省漢口の對岸武昌に在る湖北繰絲官局は即ち官立にして一昨二十八年の建設に係るものなり該製絲所は四川湖北湖南等諸省の產繭を用ふる目的なりしも同地方の產繭は試驗の結果其品質不良にして到底器械製絲に適せざることを發見し本年は江蘇省無錫地方の產繭は購入するの計畫なりしと云ふ蘇經絲廠は蘇州に在り其組織は官立の如く或は株式會社の如き性質を帶びたるものにして日清戰役の當時政府が蘇州の富豪より借入れたる七朱利公債六拾萬兩を移して其儲資本に替へ公債の持主を株主と爲し更に六拾萬兩の追株金を加へ合計百二拾萬兩の資本となし器機製絲及紡績業を起したるものなり營業の執務者は政府の官吏にして而して株主には政府より下付する七朱公債利子の外に尙ほ營業の利益を配當するものなりと其他純然たる民有の製絲所に在りても亦概ね政府の勸誘に依りて成りたるものなりと云ふ

廣東省に於ける製絲業も亦從來の坐繰法は江蘇浙江と大差なしと雖も器械製絲に至りては甚だ粗劣なり其起源は遠く三十年前のことにして當時廣東省南海縣西樵鄉の人陳老七なる者の開く處なり始め同人は佛國に航し器械製絲法を學び歸國して其鄉に製絲廠を創設せり之れ實に清國に於ける器械製絲の權輿なりとす然るに此製絲廠は未だ數年を經過せざるに官吏及紳士の反對を受け遂に番禺牙餉の澳門港に移轉せり今尙ほ同地に在り然れども衞來之を建設するもの漸く增殖し現今に至りては同省器械製絲所の數三四十人取より五六百人取迄のもの四十八個所あり而して一個年凡そ四萬個（九貫目一個）を製造し外國に輸出すと云ふ其器械の模造は本邦の如く多くは佛國製舊式の二口取として）の生絲を製造して粗雜なりと雖も工場の建築は大概廣大にして且つ各所器械の樣式一定なる點に至りては本邦現時の狀態に比し大に勝れる所ありと謂ふべし今左に同省中陳村及大良縣城外製絲廠主に就き質問せし應答條項を揭げて以て參考に供せん

陳村に於ける洋式器械製絲所創立は十二三年前にして現今三個所あり豐個所に付工女大約四百人工男約三十人なり、廣東省に於ける洋式器械製絲所の多き地方は順德縣大良縣南海縣等にして就中南海縣の如きは樂松と云へる處に四十人繰より百人繰位のもの五六十個所あり而して各地共漸次增殖の勢ひありと云ふ、器械製絲の原料に供する繭は曾良繭を撰びて購入するが故に甚だしく品位の異なれるものなし、百斤の生絲を繰り得る原繭の量は最上等の繭にして撰別を良くせるものなれば乾繭四百斤にて足れども尋常のものに在りては六百斤以上を要す、生絲百斤の製造に要する費用は太絲百三十圓乃至百五六十圓絲二百圓位なり、工女一人に付一日の繰絲高は巧みなる者は六十匁拙なき者は三十匁にして平均四十匁位なり、工女の賃銀は絲量十匁に付清錢四十八文なり是を當時の洋銀相場に換算すれば四錢七厘なり（洋銀十錢に付清錢百〇五文）而して食料は被雇者持にして概ね通勤なり、工男の給料上等は一ヶ月十二圓下等は三圓位にして食料は雇主に於て給與す、生絲の太さは細絲は繭六顆を合せて繰り太絲は八顆乃至十二顆を合せ繰るなり而して八顆繰にて十四デニール乃至十四デニール半の生絲を得ると云ふ、製絲の際繭を煮るには繭綿を除去せずして其儲煮る

法なるを以て屑絲を生ずること非常に多し今五斤の乾繭にて一斤の生絲を繰り得るものとすれば屑絲百匁乃至百二十匁を生ずゝ之を百分比例すれば左の如し

種別	生絲	屑絲	蛹	其他
屑絲百目とすれば	一〇、〇	一二、五	六七、五	
屑絲百二十目とすれば	一〇、〇	一五、〇	六五、〇	

輸出先は概ね歐米にして歐洲へするもの八分米國へ向くるもの二分位の割合なり

蠶繭　江蘇、浙江は繭の產額非常に多きも昔時は悉皆養蠶家各自に坐繰絲（坐繰にわらず昔足踏器械を用ひて繰絲すれども洋式器械と區別上分り易き爲め坐繰と記す以下之に倣ふ）を製し之を絲行即ち問屋に販賣する慣習なりしに大約二十年前上海港に洋式製絲器械の創立ありしより以來江蘇省中無錫附近浙江省中紹興附近に於て繭にて販賣する者漸く多きを加ふるに至れり而して浙江省は蠶業地の區域頗る廣大なり杭州府中錢塘、海寧、餘杭、仁和、嘉興府中嘉善、石門、桐鄉、湖州府中烏程、歸安、德清、紹興府中會稽、蕭山、諸暨、蕭縣等の各縣は就中盛大にして繭の產額最も饒多なり然れども同省に於ては繭にて販賣するもの甚だ少なく僅に紹興府蕭山及蕭縣附近にて數十萬圓位の賣買あるに過ぎずと云ふ產繭の品位は概して良好にして江蘇省所產に優れること數等なり紹興府及湖州府下の產に至りては特に佳良なりとす故に其價格の如きも之を江蘇省產のものに比すれば概ね一割六七分乃至二割の差を見るなり

江蘇省に於る產地は蘇州府及常州府中の數縣にして殊に常州府下無錫縣附近は其產額最も多量なるを以て上海の洋式器械製絲所の原料は勿論外國に輸出する繭は概ね同地に於て購入するもの多量なりと故に同地に於る繭賣買の狀況は非常に盛にして收繭より發蛾に至る僅々二週日位の間に於て數百萬弗等の設立に係る繭行（繭の買入所）と稱する處に於てするなり繭行は其規模甚だ洪大にして現時無錫附近（大約邦里二十里方の間）の地に設置せられあるもの百有餘々所其乾繭室の數五千五百の多きに及べりと又繭行に於て爲すべき所の業務は大略繭を買集すること、繭を殺蛹及乾燥すること、乾繭を荷造り運搬すること等其重なるものとす而して繭賣買法の大要を略述すれば買主同業者は收繭前に至るときは先づ會議を開き（清國には何業者にても皆同業組合を設け商品賣買の開始其他重要の件あるときは直ちに其倶樂部に集會して買始めの日限價格等の事を議定し置くなり故に各繭行共皆同一の日限より買始む）買入の日限及價格を議定して各地樞要の場所に之を掲示するなり然るときは賣人即ち各養蠶者は皆爭ふて繭を繭行に持ち來りて賣却す品位の鑑定重量の秤定等の調査は皆買主即ち繭行掛員の擔任する所にして其直段若し折合はざるときは破談となるなり而して賣主一人の持ち來る繭の量は多きも二三百斤を超へず掛きは五六十斤に過ぎざるを以て繭行開始以來は毎日早朝より日沒に至るまで門前數百人の繭賣蟻集するを常とす而して繭行にては其買入れたる繭は直ちに之が殺蛹乾燥に着手するなり

繭の乾燥法は其規模頗る洪大にして參考に資すべきものあるを以て左に之を詳記せん

烘房（即ち殺蛹乾燥室の事）清國に於ける烘房（殺蛹場）は西人の發明に係るものにして其構造の大要は下に記する所の如し材料は凡て煉瓦にして特に肝要の場所には耐火煉瓦を用ひたり此烘房の特色とする所は煙突の如し材料は凡て煉瓦にして生繭を完全に乾し上ぐるに在りとす故に同功繭或は屑繭等の下等品を乾燥するには大に便益なるべしと雖も上等繭の爲には或は未だ至適の良法と爲し難きものなるが如し然して其發明を必要なりとし且つ之を促したる清國蠶絲業の事情は左の如し

抑も清國器械製絲場の所在は概ね上海附近にして之が原料の供給地は遠く江蘇、浙江の地方なるのみならず內地には釐金局なるものありて各地に於て釐金稅を徵收するの制なるが故に其脫稅又は密輸出等のあらんことを恐れ昔時は一切の貨物を蒸汽船にて運搬することを禁じたりし然るに普通の運搬船なるときは百里以上の道程に達するには通例一週間乃至十日間を要せざるべからず之れ到底生繭若くは乾燥不十分なる繭にて運搬に得られざるの事情にして必ず產地に於て十分に乾燥せしめざるべからざるに至りたる所以なり而して清國養蠶家は從來は皆て殺蛹乾燥等のことを知らず皆生繭の中に繰絲するの習慣なりしを以て今日の如く繭販賣の行はるゝに至りても之を乾燥するが如きこと絕てなく收繭の後は直ちに繰絲するか若くは賣却するが故に製絲家又は商人が繭買入れ從事するや僅々數日の間に數萬若くは數十萬斤の多數を蒐集せざるべからざるの必要あり而して斯く一時に買收したる巨多の繭は皆之を乾燥せる後始めて工場に向け運搬せざるを得ざること前記したる所の如し之れ可成的

の少時間に可及的多量の繭を乾燥する必要の因て起これる原因なり是を以て烘房は短時間内に多數の繭を乾燥するを要する塲合に於ては最も適當にして便利なる良法と云ふべし

烘房は八時間乃至十二時間にして生繭を全く乾燥せしむ斯の如く少時間に能く乾燥するものは清國産繭は本邦繭に比して概ね繭層薄く且蛹形小なるが故なるべし、烘房は地面及周圍より濕氣の侵入せざる様殊に注意を加ふるを要す、乾し上りは乾繭の量生繭の十分の四以下に減じたるを以て度とす、溫度は列氏の六十度より七十度(華氏百七十八度二五より百八十九度五に當る)の間とす(寒暖計は普列氏なり)此法は非常に溫熱するにあらざる以上は一時に乾燥するが爲に却て繭の解舒を害することなきが如し

又紹興府曹娥村隙之清と云ふ繭商人の行ふ乾燥法を聞くに稍丁寧なるものあり即ち始め乾燥すること四時間にして室を出し第二回目亦四時間第三回目は三時間にして全く乾燥を終るものなり而して數多の繭を堆積するときは其下に蛇籠様のものを置き空氣の流通を計れり左に同和繭行に就て調査せる組織の概要を掲ぐべし但同行繭買入出張所は大約八ヶ所にして乾繭室は六十室あり

繭行組織　秤方五名(百五拾弗)巡視(買入出張所を巡視するもの)三名(五拾四弗)票(切符方)四名(七拾貳弗)賬簿(帳簿方)四名(百〇貳弗)碼(買入出張所より來る繭を陸揚するもの)三名(五拾四弗)朕簿(百〇貳弗)帳四名(七拾貳弗)應翅(應接方)六名(百八拾弗)秤塲(照料)六名(百〇八弗)菜房(賄方)四名(貳拾四弗)機司四名(貳拾四弗)看繭(繭監定方)二名(七拾弗)雜務四名(七拾貳弗)烘房三名(七拾八弗)　盖印(捺印するもの)二名(三十六弗)小役九十名(六百三十弗)計百四十四名(千七百四拾三弗)

右は日數大約十五日の豫定にして右費用の外

乾繭所修繕大約五百弗、地代五百弗、百四拾四名の賄料貳百八拾八弗、買入出張所其他旅費貳百八拾八弗、薪代千八百九十弗を要す其他の繭行に於ても皆大同小異なり

同國に於ける蠶繭の賣買幷に之に伴ふ所の乾燥法等の現獲の洪大なること右の如し然れども舊來の方法により養蠶家各自が其收繭を繅絲する者にありては前項に於て述べたるが如く決して殺蛹乾燥等の法を施すことなく皆必ず生繭の中に於て繅製するものなり故に此間は甚だ急忙を告げ一家擧て之に從事するは珍しからず之れ一たび火焙を經たるものは當に其解舒不良にして切斷し易きのみならず絲の光澤生繭の如く潤美なる能はざる故なりと云へり

屑繭は之を撰別して麁絲を製造する者あり其名稱を擧ぐれば左の如し

綿繭(本邦に同じ)蛆殼繭(蛆殼)映頭繭(死籠)凹赤繭(稞蛹の繭)穿頭繭(繭端穴あるもの)草回繭(マブシの形附きたるもの)尿緒繭(尿に汚れたるもの)同宮繭(玉繭)

死籠り繭にして汚汁を浪すものは之を陰繭と云ひ清水に浸し毎日兩三回水を易(製絲終りて後之を煮手を以て抽き綿綢を織るに用ひ出殼の汚れたるものの亦た清水に浸し汚物を洗ひ去り前者と同じく之を用ふと云ふ

外國に輸入する蠶繭は概ね江蘇省無錫金匱等縣の産出に係るものなることは前已に述べたる所の如し而して去廿七年より三十年に至る四年間輸出數額及其仕向先を表出すれば左の如し

年度	數量	輸出先 佛國	米國	英國	印度埃及	日本海峽
三十年度	一〇、七四〇	四、三八〇	一四〇	二一七	〇	六、一六五
廿九年度	五、五五四	二、三二七	九三五	一	〇	二、二九二
廿八年度	六、一九六	二、〇一九	九六九	七三〇	〇	二、八七八
廿七年度	六、六三八	四、五三八	六四五	八九八	一	五五六

(備考)三十年度とは廿九年六月一日より三十年五月三十一日までの間を云ふ

即ち最近三ヶ年間に於ける輸出の數量は概ね五六千担の間を昇降せるに止りしが今年度に至り俄に增加して一萬担餘に至れり其原因は前記繭産出の地方に於ける蠶兒の揃立二割以上增加したるが爲め多少の不作なりしにも拘はらず輸出に增加を來したるに依る而して本邦への輸出額は毎年二三千担に過ぎざりしが今年は俄に六千担餘に至れるものは本邦に於て玉繭屑繭の需用大に增加したるに依るものなるべし右の如く單に數量の表面より之を見れば蠶繭の輸出は漸次增加するの傾あるが如しと雖も其實製絲に供用すべからざる玉繭屑繭の增加に過ぎず加之近年上海其他の内地に於て物與せる器械製絲塲に於て需用する數額は將來益〻增多なるべければ假令其生産力に於て多少の進歩を見るも繭販賣の風漸く養蠶家間に行はるゝに至る迄は到底之が輸出額を增進せしむるの餘地なかるべし今本邦に於て

清國蠶繭を輸入せんとする場合に要する諸費の概算を擧げて參考に供せんに前已に述べたるが如く清國養蠶家は殺蛹乾燥等の事を行ふものなく皆生繭にて販賣するの風習なるが故に繭を買收せんとする者は必ず其産地に於て繭行即ち買入幷に乾燥所を設置せざるべからず而して之が新設費は少なくも六七千圓を要し使用の時日は一ヶ年中僅に一ヶ月内外に止まるものなるを以て其規模成るべく宏大なるを以て得策とす今左に乾燥室六十個を有する繭行に於て一期間に生繭三十萬斤を買入れ之を乾燥し本邦へ輸入するに要する經費額を示さん

一金十二萬九千二百十八圓二十五錢　内譯

金七千四百〇九圓　乾燥所諸費　内譯

金九千圓　落地損（本邦の蛹部（税に類す）生繭百斤に付三圓）

金千百四十三圓　諸雇人（支那人）給料

金二千〇二十五圓　運金税（乾繭百斤に付三兩半即ち邦金二圓二錢五厘）

金六百圓　役員三名給料及交際費食料等

金四千〇五十圓　輸出税（乾繭百斤に付三兩即ち邦金四圓五錢）

金五百七十六圓　諸雇人賄料

金五千圓　輸入税（從價五分乾繭百斤に付百圓）

金五百圓　地代

金千七百三十四圓二十五錢　運賃　内譯

金五百圓　乾燥費建設費償却一ヶ年分幷に修繕費

金二百七十五圓七十五錢　支那内地の運賃

金八百圓　生繭買入出張所諸費

金千四百五十八圓五十錢　上海横濱間の運賃

金千八百九十圓　薪炭料

金八百圓　諸雜費

金十萬圓　生繭三十萬斤代

金二萬〇〇七十五圓　諸税金

右の計算は本邦横濱に陸揚げするに至るまでの總經費にして之を生繭百斤に對すれば幾何の割合に當るやを計算すれば左の如し

一金四十三圓〇七錢三厘